289
C93-2
(2)

始

289
C93
2(2)

カーライル著

ロムエル傳

巻中

大正
2. 10. 30
円

クロムエル傳　中卷

中卷目次

第五編　愛爾蘭出征

(一)書翰第八十七—第九十六……三百四十五頁
(二)平等組……三百六十七
(三)書翰第九十七—第百〇二……三百七十八
(四)愛爾蘭太守宣言(第一回)……三百九十一
(五)愛爾蘭戰役……三百九十四
(六)書翰第百〇三—第百〇六(トリーダの襲擊)……四百一
(七)書翰第百〇七(エクスフォードの襲擊)……四百十

(八)書翰第百〇八—第百十二(ロス……四百十六
(九)書翰第百十三—第百十八……四百二十一
(一〇)愛爾蘭太守宣言(第二回)……四百三十七
(一一)書翰第百十九—第百廿一……四百五十五
(一二)書翰第百廿二—第百卅二……四百五十八

第六編　蘇格蘭出征

(一)蘇格蘭出征……四百八十三
(二)書翰第百卅三—第百卅八……四百九十
(三)書翰第百卅九—第百四十六(ダンバーの戰)……五百七
(四)書翰第百四十七—第百四十九……五百三十五
(五)書翰第百五十—第百六十一……五百四十三
(六)書翰第百六十二—第百八十一……五百六十
(七)書翰第百八十二、第百八十三(ウースターの戰)……五百八十八

第七編　小議會

(一)書翰第百八十四—第百八十八……五百九十九
(二)演說第一……六百二十二
(三)書翰第百八十九—第百九十一……六百四十二

中卷目次終

第五編

愛爾蘭出征

一六四九年—一六五〇年

(一)書翰第八拾七—第九拾六

一八四九年一月三十日午後、チャールズ王の處刑終はりて、命により守衛エドワード・デンディは喇叭手騎兵等を從へて、チープサイド其他に於て、人々に聞えるやう明かに公示して曰く、此英國に於て議會の權威に依らずして新王を立てんとするものあらば、叛逆者として死刑に處せらるべしと、其翌日喇叭手が此勤務のために各〻十シリングの報酬を受けたと云ふことが記錄にある、又各州知事、各町長等は此公示を各〻其地方に於てなすべき命令を受けた。

續いて議會の內外に於て國家鎭靜を目的とした討論會、委員會、相談會などが處々に起つた、讀者は次の二事業を知つて思ひ半ばに過ぐるであらう。

第一、議員トーマス・スコット少佐（此人のことは後に委し）が參

議院法案といふものを議會に提出した、これ參議院を起して之を行政の主腦たらしめんとするのである、此參議院の會員四十一名は議會に由て選定され、其第一會は二月十九日ダービーハウスに開かれた、ブラッドショウ、フェヤフハクス、クロムエル、ホイットロッグ、ハリー・マートン、ラッドロー、小エーン等は其議員となつた。

〔譯者曰、上編三十三、四頁に國家參事會と記せしも其譯語妥當ならざる故之を參議院と改む〕

第二、そして遂に次の如き大なる宣言が表はれた、簡單にして强剛——正にスパルタ的と云ふべきである、曰く「議會は次の事を公示し又實行す、英國及び其領土、屬國の人民は爾今以後共和國又は自由國 (Commonwealth or Free-state) を形づくるものたるべし、而して共和國且自由國として支配せらるべし、——支配する者は此國の最上權即ち議會に於ける人民の代表者、及び議會が人民の幸福のために任命したる將校と官吏にして、王及び上院は無し」と、——どんな改造や相談の行はれたかは、讀者の想像に任せて茲に細說しないことにしやう。

不思議のやうだが、かゝる大なる國家的事件の合間に、次のやうな家庭的小事件が起つた、之はクロムエル中將が、偶像的王政を崩して宗教的共和政を建つるに惚忙たる間にも、長子リチャードが婚姻のことを心配した事で、此のごとき小事も亦世に起るだけの權利があるのだ。

即ちリチャード・クロムエルは、千六百四十九年五月一日ハースレーに於てドロシー・メーヤー孃と結婚した、ドロシーの妹アンは後間もなくバーク州ブセーのヂョン・ダンチ氏に嫁したが、此ダンチ氏が後クロムエルの手紙十七通を蒐集したので、次の十通は其中より載せたもの、殘りの七通も後に掲げる。

書翰第八十七

クロムエルとメーヤー氏との間の子女の結婚については、初め大佐ノートンが口を利いたのであるが、一時中絶した、處がサウサムトンの牧師ロビンソン氏より再度の勸誘ありしに對して、クロムエルは次の返翰を發した。

貴君よ、

御親切なる御書面に接し感謝この事に有之候、該件については次の如く隔意なく申上度候。

大佐ノートンが小生とメーヤー氏との間に該件を提出され候處、當時メーヤー氏は或事情のために、心之れに傾く能はざるを確めたるに由り、ともかくも小生は神の攝理に信托して、そのまゝに致し置き候。

然るに今貴君に於て此縁談の復活を計られて、御手紙下され候については、生は卒直に御返事申上候、貴君が彼婦人〔譯者註メーヤー氏の娘〕の人格に關して保證致され、社會がメーヤー一家の信仰深きを稱し候上は、兩家の滿足する如き條件を以て交渉の復活することは小生の喜ぶ所に御座候、但し小生は決定の早き方兩家のために好都合なるべく存じ候、主其榮光にまで萬事を導かんことを祈る。

小生は此事に關して貴君の御加禱を乞ふ、以上。

一六四九年二月一日、倫敦にて　　オリヴー・クロムエル

サウサムトンの說敎師
愛友ロビンソン樣

「二月一日」と云へば木曜日である、王の處刑は火曜日であつた。火曜の夜ハミルトン侯はヰンザーを逃れ出でたが、翌朝サウスワークで三人の騎兵に捕へられて再び議會に送還され、間もなく他の者と共に新高等法院の審問に附せられた。

書翰第八十八

貴君よ、

愚息と御令嬢とに關する提議の復活については、前々よりも聞く處あり、又今度ロビンソン氏より書面に接し申候、氏は今月五日附の貴翰を封入して送り呉れ、以て貴意の此事の決了を喜ばるゝにあるを知るを得申し候。

依て小生は愚息を貴家に送り、若き二人が會見せし上にて不承知にあらざる節は、神もし許し給はゞ小生も亦甚だ事の決定を喜ぶとの由を傳へ度く存じ候、之について如何ほどの自由を與へくるるかは、貴君の意志のまゝに御任せ申すべく候。

主其榮光にまで萬事を導き行かんことを祈る、以上。

一六四九年二月十二日、倫敦にて　　オリヴー・クロムエル

畏友リチャード・メーヤー様

トーマス・スコットは參議院の成立に熱心にして、クロムエルが此手紙を書いた翌日即ち十三日に議會にて此議成立し、參議院議員は其翌日選擧せられた。

此頃はアイルランドの狀態及び其救濟について種々相談があつたものだ、オーモンド侯はチャールズ一世の王子（自らチャールズ二世と呼ぶ）より頼まれて昨年アイルランドに現はれ、執念深くも法

王黨臭味連の一致を計つて、其勢をさ〳〵侮りがたく見えた、戰の始るのも近からう、しかし其前に尙四五件の處理すべきがある。

書翰第八十九

一六四九年二月十九日（月曜日）に參議院は其第一會を開いて茲に初て成立し、政務の處理を開始した、クロムエルが最初此參議院の假議長を勤めたやうである、定まつた議長を置くにも及ぶまいと云ふ事が議決されたが、間もなく其不便なることが解つて、ブラッドショウが議長に任命された。

偖クロムエル家の結婚事件については、牧師スタビルトン氏がクロムエルの息リチャードを伴ひてハースレーに赴き、メーヤー家にては極めて鄭重に待遇し、ドロシー孃は羞恥と微笑とを以て之を迎へ、結婚成立が甚だ好望に見えたので、スタビルトンは其由をクロムエルに報じた、それに對してのクロムエルの手紙が之れである。

貴君よ、

小生はスタビルトン氏に由て貴翰に接し、又愚息が懇切なる御待遇に預り、且御令孃と接するの自由を與へられしことを知り申候、御令孃の淑德と信仰について充分の報告を受け、小生甚だしく此點に敬服仕り候については、小生自身としては一日も早く婚儀の成立せんことを渴望致し候、唯此上は若き二人の決意如何と、大能の攝理の中に事の兩家に滿足を與うるやう決し行くことの如何に依り申候。

之がため小生自身貴家に參り度く候へども、公事多端にして能はず、貴君の健康亦小生を訪ふに適せざる由傳聞致し候、故にスタビルトン氏に萬事を云ひ含め置き候につき、充分同氏と御相談被下度、貴君と小生との會見は此際甚だ必要とは存じ候へども、神

之れを許し給はざるに由り、願くはスタビルトン氏に充分の御信任を與へ被下度候。

主其榮光と其僕等の安慰にまで此事を導き給はんことを祈る。

一六四九年二月廿六日、倫敦にて

オリヴー・クロムエル

畏友リチャード・メーヤー様

書翰第九十

一六四九年三月八日（木曜日）、僅かに議員六十人を越えぬ議會に於て、ハミルトン公、ホランド伯、キャペル卿、ゴアリング卿、サー・ジョン・オーエンを殺すべきか、生かすべきかに就いて討論行はれて、投票があつた。

彼等は既に新高等法院に於て審問せられて、叛逆の罪ありと決定せられたのである、そこで議會は、彼等を處刑すべきか執行猶豫にすべきかと云ふ決定をせねばならぬのである、ハミルトン、ホランド、キャペルの三人は少數の差を以て死刑と定められ、餘は執行猶豫の恩典に浴した、ゴアリングについては贊否同數であつたが議長レンサルが「生」と叫んだので死を免れた。

さて、例の家族的小事件はどうなつたであらうか。〔譯者曰、原文茲にクロムエルのメーヤー氏に宛てたる手紙あれど、前翰と殆ど同一にして唯事件の進陟を願ひし短翰なる故省く〕

九日の朝動き易きハミルトン、動き易きホランドは、曾ては議會最初の戰士たりしキャペル卿と共に、宮殿の庭に於てあはれ斷頭臺の露と消えた、あはれなる公爵よ、これが實に公の凡ての外交術の終局であつた、彼の四萬の蘇軍と御苦勞なる進軍は、皆此一悲劇的終局に歸してしまつた、ラナーク伯代つてスコットランドのハミル

トン公となるであらう、願くはより好き運命の彼を待たんことを！

ホランド伯も曾ては人民の熱心な味方であつたが、少し以前に急に王黨に籍を變へたのである、憐れなる伯爵よ！　キャペル卿の死に臨んでの態度は實に立派なものであつた、剛勇なる羅馬人のそれであつた、彼は死の近づくを知らぬが如く、大膽と決意とを持して斷頭臺の上に終始した、其振舞は實に何處に風が吹くかといふ風であつた、――初て議會に憂國論をなしたキャペル卿は、王黨の一員と化して此の如き死を遂げた、七年の間に一人の人に此大變化があつた、劇の序幕は其大詰を知らなかつた。

此新高等法院といふのは此頃七ッ八ッあつたが、所謂立憲思想の人々には大分批難せられた、判事が證據に反する判決を與へたと批難されたことはないが、しかし彼等は正しき判事ではなかつた、議會の法律を善となし、凡て議會の意を行つたものである。

數週後、例のペムブロークの泥醉大佐ボイヤーは、同じ仲間のバウエル、ローアンと共に軍法會議にて死罪に當るとの判決を受け、三人の一人が抽籤で死して他の二人が助かることゝなつたが、ボイヤーが籤に當つてコヱント園に於て銃殺された、憐れなる迷妄のエレルズ人はかくして卒つた。

上述の如く「違反者」の重なる者は處刑せられてしまひ、其餘の末輩連は以後從順なれば免し置くと云ふことになつて、議會の斧はまた用なきに至つた。

書翰第九十一

〔譯者曰、些事に關せしものなる故其說明と共に之を略す。〕

此書翰をクロムエルが認めし前日即ち三月十三日（火曜日）に、參議院に於て「アイルランドに出征すべき軍隊の組成」について相

談があつたが、もし指揮官の誰であるかゞ解れば其組成も自ら出來るであらうと云ふ意見が提出された（多分フェヤフハクスの提案であらう）、中將クロムエルが指揮官たるべしとは誰人も豫想する處であつた。

なほ又、此夕最高府の紳士二三が、ホルボーンの小屋にヂョン・ミルトンを訪づれたのを見た人もあつたらう、若きサー・ハリー・ヱーンも其中の一人であつたらしい、それは政府より或依囑をミルトンに致すためであつて、此夕たしかにミルトンに面會することが出來た。

當時の公書にも此事は載つて居るので、ミルトンを外國語掛りの書記官に採用せんとし、ヱーン等はミルトンの意志を確めて參議院に復命するために訪ふたのである、ミルトンは突然此依囑に會して承諾し、翌々日に正式に任用せられ、參議院に大滿足を與へたの、否全國、全世界に大滿足を與へたのだ！

さて此書翰と同日に認めた例の息子リチャードの結婚問題に關するものがある、メーヤー氏の方から何か財產問題等に關して面倒な條件を提出したので、之に對するクロムエルの返翰である、まことにメーヤーと云ふ人も一寸と鋭い男らしい、しかし彼は自分よりはずうっと大きくて而も鈍くはない男を對手として談判をして居ると云ふわけだ。

書翰第九十二

〔譯者曰、此手紙は、メーヤー氏側より結婚條件として金錢問題、其他に關する種々の注文があつたのに對する不承諾の返事である、其委細は少しも我等の興趣を惹かぬことである故、末節だけを譯出する〕

貴兄よ、小生及び愚息に對する御好意、御厚情については感謝の

至りに有之候、御息女の淑德については、唯他人の評によりて遠隔の此地より知るのみにて候が、小生は之を感謝し之を尊重致し居る次第にて候、かゝる次第につき、小生は金錢問題に於て喜で我意を捨てゝ貴意に從ひたるが如く、他の諸點に於ても喜で御承諾致し度くは存じ候へども、もし上述の如く主張致さゞる時は、自己の理性にも友人の忠告にも甚だしく違背することゝ相成候、これ生の堪へ難き處にて候。

以上の如く卑見を明かに致し候に付、何卒愚息を使者として、御意見御決心のある所を速かに御報知被下度願上候、以上。

御令閨及び御息女皆様によろしく

一六四九年三月十四日、倫敦に於て

オリヴー・クロムエル

ハースレーにある

畏友リチャード・メーヤー様

此翌日即ち十五日（木曜日）に、中將クロムエルはアイルランド出征軍總指揮官に任命せられた、ミルトンが外國語書記官に任せられたと同日である、共に滿足此上なき任命であつた。

書翰第九十三

三月二十五日、クロムエルは大多忙の中に、メーヤー氏の親戚に托して短翰をメーヤー氏に送り、先方の申込の殆ど全部を承諾した、大多忙中に書いた手紙とは一見して解る。

此手紙を持て行つた親戚といふのはバートン氏といふ人である、クロムエルの總指揮官任命は議會に於ても承認され、其條件も定まつたので、彼は大に忙しくなつたのである。

〔譯者曰、此間に書翰あり、今述べし通りの趣意のものにて、殆ど全部メーヤー氏に讓歩したと云ふても宜い程の點まで條件を改めて、其速かなる同意を求め、結婚の早き成立を望んだものである、前の書翰を略せし關係上之をも略す〕。

かゝる間に、軍隊内の純自由派は、クロムエル等が權勢の地に立ちて漸く專斷の風あるを不快とし、之に反抗するの色を表はし始むるに至つた、中佐ヂョン・リルバーン等は小冊子などを配布して、英國が舊い束縛を斷ち切つて復た新しい束縛を得たのであると公言した、〔譯者註、成程之は側面觀として半面の眞理を有する斷定である、クロムエル等は慥かに其形に於ては完全なる自由國を建てたのではない、自由とか不自由とか、壓制とか民權尊重とか云ふ問題は彼等の知らぬ處である、彼等は私慾のための壓抑政治を破壞して神の政治を始めやうとしたのである、そして此理想を行ふためには、必要の場合には自由をも與へるし又專斷政治をもするのである、此理想なくして唯自由のみを唯一の賴とするものゝクロムエル等に反對するのは當然である〕、爲にリルバーン及び其徒黨のリチャード・オヴートン、ヰルヤム・ラルヰン、トーマス・ブリンスは、間もなく倫敦塔へ監禁されてしまつた、之は三月廿七日の事である、今や實に軍隊にも又一般社會にも、甚だ危險なる麹酵があるのである、曰く、神の敵は滅ぼされ、重なる「違反者」は罰せられ、「敬神の黨派」が勝つたのに、「神的黃金時代」は何故直ちに來ないのであるかと、彼等は革命の結果の自分等の思ふやうにならなかつたのに悶へたのである。

書翰第九十四

右の書翰を受けたメーヤーは、其中の一事について不承知なる旨を答へ來りて、他の方法を申送つてそれに承諾せんことを求めた、

クロムエルは次の返書を出した。

貴君よ、

今月二十八日附の御書面正に拜受仕候、彼點については何卒小生の申し送りし通りに御承諾被下度、貴君の御申越の通りに爲すは甚だ不便利なるべく思はれ候。

他の點について小生が悉く承諾仕りしことの貴君に充分解り候事は、御書面により明かにて候、主、貴君と余との間の此大事を善く解決し給はらんことを祈る。

此方の事は小生急ぎ處理すべく候、小生はアイルランド行と定まりて間もなく出發すべく候、主許し給はゞ出發以前に、事の圓滿に解決せんこと望ましく候、御家族皆々様に宜しく願上候、以上。

一六四九年三月三十日、倫敦にて

オリヴー・クロムエル

パースレーにある

畏友リチャード・メーヤー様

書翰第九十五

書翰第九十六

〔譯者曰、前者は四月六日附、後者は四月十五日附の書翰である、ともに結婚事件に關するもので、殊に後者は凡ての結婚條件に應ずると云ふ趣意である、前同斷の理由にて省く、尙曰、譯者は此邊に於ては餘り書翰の譯を略し過ぎたやうに見えるが、これ此結婚事件の紛糾錯綜の中に入ることの些の利なきを思ふてのことである〕。

クロムエルがアイルランドに出發する前には、まだ〳〵處理すべき事が多かつた、軍資金は未だ調達されず、軍隊の組成に或困難があつた、書翰第九十五の認められた翌週のこと、議會の委員（クロ

ムエルもサー・ハリー・ヴェーンも此委員の一人であつた）は倫敦市に行つて、軍資として十二萬磅を貸すや否やを知らんとした、市會議事堂に於てクロムエルの説明あり、又討論あり、遂に市は軍費を貸さうと云ふことになつた、さて之で軍隊の組成が出來ると、直ぐ出征するといふわけだが——？——

書翰第九十六飛んで茲に子息リチャードの結婚は決定し、一六四九年五月一日に式が擧げられた。

偖此新夫婦の運命は如何、リチャードはクロムエルの死後其後を襲ふたが忽ち退職の已むなきに會した、彼は一七一二年七月十二日齢八十六にしてチェスハントに死し、妻は一六七六年一月五日ハースレーにて死して其地に葬られた、妻は生家に歸つて居たのである、一世紀の後ハースレーのメーヤー家の邸宅は他人の手に歸したが、其時古い壁の間から金屬の銹びた棒を見出した、之は共和政府の大璽であつたとやら。

（二）平等組

ドロシー・メーヤー嬢は婚姻の晴衣を選擇し、リチャード・クロムエルは花の如き新婚生活を夢みて居る間に、リチャードの父及び其他のためには、公事に關する一の甚だ目出度からぬ事件が發生して、直ちに其處分をせねばならぬことゝなつた、之は平等組（Levellers）と呼ぶ一味の連中についてゞある。

前にも云つた通り、一六四七年既に軍隊の中に叛亂を企つるものありて、政治上及び宗教上に完全なる自由を獲得して、速かに地上の神的黄金時代を實現せざるべからずと云ふ理想を標榜した、叛徒の巨魁十一人は軍職を褫奪されて軍法會議に廻され、死刑の宣言を

受け、其一人アーナルドは直に銃殺されて叛亂は一時鎮靜した、其後の戰鬪、「違反者」處分、自由共和國建設等は軍隊をして多忙ならしめた、然るに今や深き民政思想の麹酵は再び醱酵して恐るべき大混亂を起さんとす、平等組といふもの即ちこれである、これカルヰン的過激主義と稱すべきもの、其出現は二世紀早過ぎるのである。

ホイットロックの著書などに據て當時の有樣を見ると、大凡こんな風である、丁度バートン氏が例の結婚事件について下手な盡力をして居る頃、平等組がサレー州に起つて山を掘つて豆などを蒔いて騷いで居るといふ報知が參議院に達した、エゼラードと云ふ者が其巨魁で自ら預言者と稱し、ヰンスタンレーも亦巨魁の一人であつた、仲間は三十人であつたが、間もなく四千になると號して居た、彼等は人民の來投を求め衣食の供給を約した、然しサレー州の白聖丘に新紀元を始めんとせし之等狂妄の徒は、遂に捕へられてしまつた。

一六四九年四月二十日、エゼラードとヰンスタンレーは大將フェヤフハクスの前に出でゝ、自分等の行動を辨明した、エゼラードは曰うた、自分は猶太人である、そして英國の有樣を見るに、ヰルヤム王の英國入以來神の民〔英國人〕は、自分等の祖先が埃及にて受けしよりも甚しき壓制暴虐を受け來つた、しかし今救ひの時は來た、神は人民を救ひ出して地の產物を充分に惠むべし、自分は近頃神の御告を受けて地を耕して其產を得んとするのである、自分等は宇宙を其原始の狀態に戻さんとするもの、地の產を享受して萬人共に喜ぶ理想的社會を造り、貧窮者に分ち與へ、衣なき者には衣を與へんとす、自分等は人の財產に手をつくるを欲せず、唯不毛の地を拓きて產を得んとするのである、しかし間もなく萬人來り投じて其財產を提出し、茲に共產社會起るであらうと。

これが此連中の山を耕し始めた理由である、かくして新紀元を造

らうと云ふのである、來り投ずるものには衣食を與へやう、金は要らぬ、武器を以て己を護る要なし、政府には服從する、唯近く來るべき機會を待つてさへ居れば宜いと曰うた。

フェヤフハクスの前に引き出されて脱帽せぬ、理由を尋ねられたら、大將も同じ人類であるからと答へた、「敬ぶべき者は之を敬べ」（羅馬書十三章七節）といふ句の意味如何と反問されると、かゝる質問をなす者の口は閉さるべしと答へた。

一六四九年四月二十日（金曜日）。中將クロムエルはアイルランド出征を承諾し、倫敦市は金を貸すことゝなり、此日白館に軍事會議開かれて、出征すべき聯隊の選定をした、祈禱して後籤引といふことに定まり、其結果歩兵十四箇聯隊騎兵十四箇聯隊、併せて二十八箇聯隊が出征することになつた、行くことにきまつた聯隊の士官は皆一樣に喜んだが、兵卒は悉くさうはゆかなかつた、兵士はリルバーン等の皷吹に由て過激な自由主義を抱き、新しき束縛の出現を面白からず思ひ、共和國に過大の注文をなして居たのである。

四月二十六日（木曜日）。此夜ホチレーの聯隊の間に一騒擾が起つた、兵士の或者は色々な注文を提出して不穩の行動に出で、旗手より軍旗を奪ひなどした、大將フェヤフハクスと中將クロムエルとは急行して之を鎮め、十五人を捕へて軍法會議に廻し、五人は有罪に定められしも宥され、ロックヤーと云ふ者のみ翌朝バウル寺の墓場に射殺された、二十三歳の勇敢なる若者にして、七年間も從軍し、信仰も篤かつたが、自由に對して熱烈なる渇仰心を抱き、神的黄金時代をあまり近く望み過ぎたのだ、あはれなるロックヤーよ！　彼は群衆の涙の中に倒れた、やがて次の週間が來た、月曜日彼の葬式は行はれた。

其葬式は實に非常なる同情の中に行はれた、數千人が此葬列に加

はつた、皆胸と帽に濃緑色又は黒色のリボンを着けて居た、婦人の一隊が後に續いた、一列エストミンスターの墓地に到着するや、行列に加はるを不謹慎となした數千の人が更に加はつた、此葬式を以て議會と軍隊とに對する反抗と見る人が多かつた、又會葬者を「平等組」と呼んだ人もあつた、しかし彼等は人の評などを耳にかけなかつた。

五月九日。リチャード・クロムエルの結婚は無事に濟んだ、リチャードの父はハイド公園で閲兵をして居る、兵の中には濃緑色のリボンを着けて居る者もある、クロムエルは熱心に彼等の誤謬について說いた、曰く、議會は今日迄ともかくも全力を盡したのである、「違反者」を罰してしまひ、先日は自ら解散を議決して後の議會に道を開いた、貿易を保護し、强固なる海軍を得た、叛亂者處罰について批難あるが、軍律に堪へぬやうな者は軍人として不適當である、速かに武器を棄てるがよい云々と、此說諭は大に効果あつて濃緑色のリボンは棄てられた、此閲兵は水曜日のことであつたが、リルバーン等倫敦塔の捕囚は各々獨房に入れられて、更に嚴しき監視を加へられた。

今や危機は來つた、火はオクスフォード州、グロースター州、司令部のあるソォルスベリー市（井ルッ州）等の隊伍の間に起り、四方八方に大火は天を焦さんとして居る、オクスフォード州にては大尉トムソンなる者二百の兵を率ゐて、「新しき束縛」と呼號し、「自由の完成」と叫び、ロックヤー等の復讐を望んだ、此仲間は其大佐より攻められて敗走してしまつたが、トムソンは數人と共に逃れて猶ほ處々を徘徊す、ソォルスベリーにても之に應じて一千の兵は叛亂を企てフェヤフハクスとクロムエルとは其鎭定に急遽出發した、中佐リルバーンの大に活躍すべき時なんだが、堅い壁に圍まれて居て

は何も出來ぬ。

五月十四日（月曜日）。日曜一日、二將軍は急行してソオルスベリーに向ひ、叛徒は之を聞いて北方バキンガム州に向つて走り、又バーク州に向つて走り、二將軍は猛烈に之れを逐ふた、叛徒はヲンテージに走り、更にオクスフォード州を志して、流を渡つてバーフォードに到着し、疲れ果てゝ眠に入つた、――二將軍は月曜日五十哩に近き長追ひを爲し、クロムエルは其眞夜中に叛徒に襲ひかゝつた、――かくして彼は叛亂を平げ、平等主義を碎いた、次は軍法會議といふ順序となる。

五月十七日（木曜日）。此日バーフォードの墓地に於て、此叛亂に加はりし旗手トムソン（トムソン大尉の弟）は二人の伍長と共に銃殺された、トムソンは悔悟の意を表し人民の祈禱を望んで潔く倒れた、伍長の一人は射手に「射て」と命令して決然として死した、もう一人の伍長はあくまで確信のために死すといふ態度で、終まで射手等の顔を眺め、毫も恐怖の色を表はさなかつた。――こんな風に彼等は死んだ、彼等の確信に依れば英國自由のための勇者であつた、死の眞際迄決然たるものであつた、誤れる伍長よ！　さりながら誤れるチャールズ・スチュアトのためにも涙を惜まざりし歴史は、之等あはれなる伍長のためにも一掬の涙を惜まぬであらう、アーナルドよ、ロックヤーよ、其他英國自由のための誤れる殉教者よ、汝等願くは安らけく眠れよかし！

第四番目に射殺さるべく現はれたる旗手デーンは、悔悟の意志を表してフェヤフハクスより赦免され、茲に於て銃殺は終を告げた、かくてクロムエルは叛徒の中處刑さるゝ事に定まれる者共を寺院に集め、叱責し、説諭し、而して特典を以て赦免する由を言ひ渡した、誤れる者共よ、神の大命に據る此主義を毀たんとするか、去れ、悔

いよ、再び叛く勿れ、恐らくはより惡しき禍に遭はんと、彼等は泣いて自己の聯隊に戻り、快活にアイルランド進軍に加はつた。――旗手トムソンの兄大尉トムソンは飽くまで叛亂の意志固く、遂に一日逃れ去りて一小林に入り、逐ひ迫る者に向つて發砲し、死すとも服從せずと叫んだ、が遂に一伍長の七連發銃のために斃れてしまつた、これで此怖しき大火災も悉く消えて一片の殘火もなくなつた。

極端改革主義は尙ほ二百年も潜んで居らねばならぬ、「平等組」の主張は英國の政治又は軍事の方面には無い、けれども心靈的方面には慥かに在る、もうセーント・ヂョージ山に豆を植えたりバーフォード附近を馬で驅け廻つたりすることは止めたが、クェーカー派等の宗敎的方面に姿を現した、衒學者君は、昔クェーカー派等に對して寛容の行はれなかつたのを歎くであらう、然しもし彼がセーント・ヂョージ山に豆を植えたり、バーフォード邊を驅け廻るのを見たならば、眞面目な世に於て「確信」と云ふものは、地上の靜肅にして速かなる實行を意味するものであると悟るであらう。

月の十七日（木曜日）の夜、大將、中將及び重なる將校はオクスフォードに到着し、オールソールズ・コレッヂに宿し、司令部を暫く此處に置くことゝした、そして既に改革されたる大學より非常なる歡待を受け優遇に與つた、ドクター、マスター、バチェラーなど云ふ學位を多くの人が貰つた、併しアイルランドの模樣を早く記さねばならぬ故、茲にオクスフォードの事は委しく記すまい。

此頃下院に感謝會あり、倫敦市の感謝祭は七月七日（木曜日）に行はれ、（全英國のそれは二十一日に擧行された）市は國會議員、將校士官、其他朝野の諸名士を招いて一大饗宴を催した、又四百磅の金を市の貧民に與へて彼等をして鼓腹せしめた、――しかしアイルランドの方が忙しい故、之等の事は詳述しないことにしやう。

(三) 書翰第九拾七—第百〇二

一六四九年七月十日(火曜日)。此夕五時頃、アイルランド太守オリヴー・クロムエルはいよ〳〵アイルランドに向つて進軍を開始した、井ンザーよりブリストルへ行くと云ふ順序である、彼の威儀堂々たる行列は前古未曾有と稱すべく、彼は立派な六頭立の馬車にて進み、麾下の將校等亦馬車を以て之に隨ひ、八十人の護衛兵は彼の周圍を圍んだ、アイルランドのオーモンド卿は此勇猛なる來襲軍に應じなくてはならぬ、勝てば大なる名譽、負けても不名譽ではないと云ふ境地にあつた、オーモンド卿が「王を與へよ、然らずば何をも與ふる勿れ」と曰ふに對して、彼等は「共和國を與へよ、然らずば何をも與ふる勿れ」と曰ふ、クロムエルの軍旗は白であつた。

斯樣にして我オリヴー・クロムエルはアイルランド出征の人となつた、出陣に先ちて種々の用務の中に、次の二の事に關はつたことが其手紙でわかる。

書翰第九拾七

〔譯者曰、之は出征の前日書いた手紙で、參議院議員ハリントンに宛て、或人の事について或依頼を爲したものである、之を略す〕。

書翰第九拾八

之は前の手紙よりも尙大急ぎで、出發の當日認めたもので、自分と同じくケームブリッヂより選ばれたる代議士の爲に計る處あつたのである。

貴下よ、

小生に對する貴下の長き御愛顧の故を以て、小生は茲に我「同區選出議員」の小なる請願の貴下に由て議會に提出せられ、且聽許を得んことを願申候、彼は此處まで來り從ひて己れの職業を失ひしのみならず、公事のために受けし損害甚だしきもの有之候、彼は眞實不斷の熱誠を以て我黨のために盡し、資產の損耗多大なりと信じ候、彼の願を充たすは、彼に對する當然の務にてもあり、慈悲にても候、又小生としては貴下の御厚誼として感謝する處に御座候、以上。

一六四九年七月十日、倫敦にて

オリヴー・クロムエル

井ルヤム・レンサル殿

クロムエルの「同區選出議員」はヂョン・ローリー氏であつた、此人の「損害」「職業」「資產」乃至經歷の如何なりしかは未だにわからぬ、辯護士であつたと想像する人もあり、淸敎主義の商人であつたとも云ふ、彼は一六四〇年の短期議會にはクロムエルと席を同じうしなかつたが、其後共に議會に選ばれたのである。

ローリーは一六四五年にはケームブリッヂの町長をしたが、其後の事は一向わからず、今突然此手紙の中に現はれたのである。

此書翰がクロムエルのアイルランド出征の當日に認められたものであることは、書翰の日附が證明して居る、多分委員會室か何かにクロムエルが居て、多端の事務に忙殺されて居る間を、ローリーは何とかしてクロムエルに面謁して、此手紙を書いて貰つたのであらう、そして此手紙は大に効果を奏し、記錄に由れば、ローリーの小請願は聽かれて、三百磅の金が彼の損害を贖ふべく彼に與へられたといふことである。

後クロムエルの子リチャード守護官たりし時、ヂョン・ローリーと云ふ人が一寸現はれるが、之が其本人であるか、或は同名異人であるか能くわからぬ、其後ヂョン・ローリーなど云ふ人は一向出て來ない、出て來る筈もない、あとは暗の葬る處、もう云ふこともない。

書翰第九拾九

クロムエルの息リチャードは婚して嫁の生家メーヤー家にあり、嫁の父メーヤーは、クロムエルに宛て少佐ロング陞進の件を依頼して來たので、クロムエルは次の返事を出した。

親しき兄弟よ、

御芳墨拝誦、貴意に關しては充分の注意と最善の判斷力とを以て致すべく候。

貴君御一家の御昌福を拝察仕り、欣喜の次第に御座候、小生は我娘〔リチャードの嫁〕の清康を祈り居るものにて、彼女も此事を知るならんと存じ候、彼女の時々小生に文通せんことを望み居る由御傳へ被下度、之に依て御一家の御模樣も相解り、又彼女の筆の練習とも相成るべきか、愚息については何卒萬端御注意御勸勵被下度、彼は喜んで御忠言に從ふべく候、小生は彼の眞摯ならんことを願ひ候、時勢は之を要し候。

我姉妹〔メーヤー夫人〕の壯健を祈り候、又我從妹アン〔メーヤー孃〕に良緣のあらんことを祈り候、御二人樣に宜く御鶴聲被下度候、且又御一家皆々樣にも宜しく小生の愛情を御傳へ被下度、小生は御一同樣の上に主の祝福を祈り候、小生今回の出征については何卒御禱り被下度候、愚妻は當地へ一寸參る途中多分貴宅に立ち寄り申すべく候。

切に御一家の御清福を祈る、以上。

一六四九年七月十九日、ブリストルにて

オリヴー・クロムエル

ハースレーに在る

愛する兄弟リチャード・メーヤー様

メーヤーは此手紙の裏に「一六四九年七月廿七日受取る」と書き記したとのことである、少佐ロングといふ人のことは一向わからぬ、クロムエルが此人のために適當の處置を爲すと返事をしたことの外は、どうなつたことか一向わかつて居らぬ。

クロムエルは十四日即ち土曜日の夕、ブリストルに到着した、此處に彼は種々準備を爲して數週を過ごした、クロムエル夫人は數日を夫と共に過ごすためにブリストルに來た事と思はれる、クロムエルは七月の末にブリストルを發し、ランビー、ペムブロークを過りてミルフォード港に到り、將に乘船せんとして次の手紙を認めた。

書翰第百

新太守クロムエルは初めアイルランドのマンスター州を志した、彼は既にダブリンにてオーモンド軍に圍まれて居る中將マイクル・ヂョンズ（もと大佐）を援けるために、二三の聯隊を其地に遣つた、處が八月二日突然敵軍が大破して圍を解いて去り、マイクル・ヂョンズは大勝を得た故、クロムエルは急に方針を更へてダブリンに向ふことにし、八月十三日ミルフォード港を出帆した、之は月曜日のことであつたが、水曜日には少將アイヤトンが別軍を率ゐて渡航した、彼は副將ヂョンズ中將の次位即ち第三位の指揮官であつた。

船のヂョン號が風と潮工合とを計つて尙ミルフォードの港にあつた時、クロムエルの妻と子リチャードは父の安全なる前程を祈るた

めに訪ねて來たが、其歸る時リチャードに此書翰を托したのである。

愛する兄弟よ、

我子の貴宅に歸るに托して一書差上げ度く、且又昨日中將ヂョンズより得たる大吉報を御知らせ申し度候。

オーモンド侯は一萬九千人の兵を以てダブリンを圍み居り、尙ほ一萬の應援軍あるとの事に候處、ヂョンズは歩兵四千、騎兵千二百を以て城中より突出し、オーモンドの全軍を覆し、其塲に四千を殺し、二千五百十七を捕獲し、其中三百は士官にて、中には將校連も交り居り候。

實に大なる恩惠、夢想の實現にて候、あゝ我等何と云ふべき！主、我等の靈を感謝を以て充たし、我等は一生中彼を讃美し彼の慈悲を忘れざる人となるべく候、此事我等の信仰と愛とを强めて、より困難なる時に備へしむべく候、願くは小生が與へられし道に於て正しく歩み得んやう禱られよ！

何卒我子に適當の忠言を御與へ被下度、彼が滿足の中に居るは結構なれど、滿足に囚へらるゝことを小生は怖れ居り候、彼が歴史、數學等を學ばんことは宜しかるべく、これ怠惰又は現世的滿足に勝る事にて、又人を公事に適せしむるものにて候。

かゝる面倒を願ひ候も御心安立の上にて候、何卒御夫人及び御令孃に宜しく、其外皆々樣に宜しく、以上。

一六四九年八月三日

ミルフォード港、ジョン號船上に於て

オリヴー・クロムエル

ハースレーに在る

愛する兄弟リチャード・メーヤー樣

扨アイルランドに於けるヂョンズ中將の大勝利については、議會の歡び限りなく、彼のために有利なる議決を爲した。

書翰第百〇壹

之も右と同じ日に、同じ人（リチャード・クロムエル）に由て運ばれた手紙である。

我親愛なる娘よ、〔子の嫁に對して〕

御身の手紙は甚だ喜ばし、私は御身を愛し居るもの、御身よりの贈り物は何に依らず喜ばしく候、さればつまらぬ御助言申上度く候。

何よりも先づ神を求め神の御聲を聽くことが大切にて候、御身にして怠るなくば主の聲は耳又は心に聞ゆるものにて候、御身の良人をも勸めて此態度を取らしめ給へ、現世の快樂や有形の事件を第二、第三とせられよ、キリストに於ける信仰に據て此等の上に出でられよ、然らずしては眞に此等を利用し又は味ふこと出來難く候、御身の淑德增し、主にして救主なるイエスキリストを益々深く味はんことを祈る、主は近じ、これ其所爲にて明かに候、アイルランドに於ける主の大恩惠は瞭かに之を示し候、委細は良人より聞き給へ、我等皆感謝の思ひに溢れざるべからず、我等かゝる恩惠について神を讃美せんには、大にキリストの精神を要し候。

我親しき娘よ、主御身を惠まんことを祈る。

一六四九年八月十三日、ヂョン號船上にて

御身の親愛なる父

オリヴー・クロムエル

ハースレーに在る

愛する娘ドロシー・クロムエルに

之等の家庭的書翰は、之より載する彼の物凄く、暗澹たる、峻嚴なる書翰の一列と相對して、温味と敬虔とに富んだものであることは、實に不可思議なる對照（コントラスト）である。

超えて八月十五日、クロムエルは順風に逐はれて、ダブリンに到着し、非常なる歡迎を受け、此偉人を看んと欲して群衆は雲霞の如く街（まち）に充滿した、彼は適當の場所にて車を停（とど）め車上に立ち上つて一場の演說を爲した、此演說は遺つて居らぬが、大凡次のやうな趣意であつた。

神は余を護りて無事此地に來らしめ給ひし故、余は大能の攝理に依りて、戰禍のため王黨のために諸君の失ひたる自由と財產を取り戻し得ること丶信ずる、眞摯に此虛黨討滅の事業に同情し、福音の宣布と眞理及び平和の確立を望み、此亂麻の如きアイルランドを舊（もと）の幸福、靜謐に還さんと願ふ者は、英國議會及び余よりの保護と厚遇とを得ること確實である、云々。

此演說は人民の大喝采を博し、「我等は君と共に生死せん」と皆叫んだと云ふ話である。

書翰第百〇貳〔略す〕

（四）愛爾蘭太守宣言

マイクル・ヂョンズ中將の軍は、クロムエルより見れば甚だ不滿足のものであつた、彼は之を新士官の下に編成し直し、殊に惡兵を逐ひて熱心之が改造に努めた、軍隊の大掃淨であつて士官等の不平も少くなかつたが、しかし公務としては是非茲までやらねばならぬ、

新しい立場に立つて進まねばならぬ時である、大覺悟を要する時である、生半の事ではいけない、されば茲にクロムエルの發した宣言を見て貰ひ度い。

オリヴー・クロムエルの特命に依り印刷に附して全愛爾蘭に公表する宣言

余は兵にして人民に對して奪掠凌辱等の惡行爲に出づる者ありと聞き、神に據つて以後斯る惡事を嚴密に抑止せんと決意せり。

余は我指揮下にある凡ての士官兵卒に警告し且要請す、以後斯る惡行に出づる勿れ、凡て敵軍に加はり居らざる人民に對しては害を加ふる勿れ、又特命に依らずしては其所有物に係る勿れ。

敵軍に加はらざる人民にして、軍隊に糧食を携へ來るは、其進軍中にあれ、屯營中にあれ、守備隊にてあれ、自由にして合法なり、而して此場合には其持參品に對して代價を得べし。又議會軍の維持其他公用のため適當に課せられたる負擔を拂ひて、穩和に振舞ふ者は、一月一日まで安らかに家に住み得て、其生命財產は軍隊の保護を受くべし、而して我軍の占領地域に住まんと欲する者は、一月一日までにダブリンの檢事總長に、現在及び將來の保護を出願すべし。

兵は皆人民の保護を爲すべし、之に背きて害を加ふる者には嚴罰を以て酬ゆべし、士官は部下の兵に此事なきやう特に注意すべし、余は此軍規に背く者を嚴罰せんと神に據つて決心したれば、もし士官にして之を怠り、又は部下の違犯者を不問に附する等のことあらば、放逐又は其外の罰を受くべし。

一六四九年八月廿四日、ダブリンにて發す

オリヴー・クロムエル

(五) 愛爾蘭戰役

愛爾蘭(アイルランド)戰役の歴史は朦朧として能く知れぬ、此國は、一六四一年の末に叛亂が起つて其叛亂が殺戮と變つた以來、絶えず爭鬪、奪掠、破門、背逆等に惱まされて、空前絶後の慘風血雨の悲劇的舞臺であつた、其歴史は亂麻の如く入り亂れてとても人間の記憶に上らぬ、繪ではない、黑い塊(かたまり)である、黨派あり、又其奥に黨派あり、外と戰ひ、又相互に戰ふ、羅馬公教徒に二派ありて主張を異にし、監督主義の忠君的王黨はオーモンド侯を戴きて誓約には反對し、アルスターの長老派は忠君的にして誓約を主張し、之にマイクル・ヂョンズ中將の王も誓約も要らぬと云ふ共和黨が英國より來て居て、之等が此八年間すつたもんだと入り亂れて騒いだので、何がどうしたのか事の眞相はかいくれ解らぬ。

オリヴーのアイルランドに着いた頃には、此アイルランドの諸黨派が皆一致して共和政府反對の旗を押！立てたので、創始したばかりの共和政府にとつては甚だ危險であつた、オーモンド侯と云ふのは第貳内亂の時ハミルトン公と結ばうと謀つた男で、今度の諸派聯合の謀主である、羅馬公教徒も、此地に逃げ込んだ英の長老派も、アルスター州に居る蘇人も、何れも皆オーモンドの下に相結びて、所謂「弑逆者(レシサイズ)反對」の聲を揚げた、彼等はチャールズ王の王子を招いて愛爾蘭王となし、以て英の共和政府に當らんと欲した、チャールズの子は蘇國へか愛國へかと迷つて居る、そしてクロムエルの來た頃には、全アイルランドの中ダブリンとデリーの外は皆王黨に屬し、前者は前述の通り此頃まで包圍を受け、後者は今尚ほ包圍を受けて居ると云ふ有樣、實に恐ろしい全アイルランドの一致！　けれども

其質は鐵と泥との混合である、クロムエルは敵の實狀を量り、鐵斧一閃之を粉碎し盡して再び起つ能はざる迄に至らしめた。

憐れなるはアイルランドの民なるかな、一六四一年彼等の奮起せしや、其要求は「信教の自由」であつた、要求は正しかつた、けれども其行動は甚だ不可解である、物凄き殺戮や血の雨が之に伴つた、要求は正當であつても、其手段は抑も誤れるの甚しきものであつた、背逆と殺戮――之等は何の結果を生むか？　八年間の騷擾荒亂は事を益々非にした、彼等に勇氣はあつた、所謂愛國心もあつた、けれども此外の必要物を多く缺いて居た、其爲す處はまるで滅茶である、其隊は混亂の塊である、訓鍊も何もない、亂暴の匪徒と云ふべきものである、此八年間のアイルランドは史上未だ無かりし修羅の巷であつた、惡魔が地獄から上つて來て、美なる神土の一部を縱橫に汚し盡したのである、暗黑不可解の八ヶ年である、而して茲に八年の

後天火來つて全アイルランドを照らすのである。

クロムエルのアイルランドに於ける行動については、批難の聲が高い〔譯者註、虐殺云々の批難である〕、吾人は今茲で此問題に入る氣はない、唯彼のアイルランド戰役中の書翰を並べるだけのことだ、兇暴紛擾の國を鎭めるのに薔薇水を以て爲やうとする人士に取つては、此等の書翰は物凄きものであらう、クロムエルの行爲は恐ろしい外科手術であつた、審判であつた、けれども之を兇惡なる殺戮と見る人もある、オリヴー・クロムエルは神の審判を信じた、著者も夫れを信ずる一人である、事は同一である、唯之を審判と見る乎殺戮と見る乎である。オリヴーの時代には神の審判と云ふ事が信ぜられて居た、やれ「死刑廢止」だの、ルソー的博愛主義だの、猶ほ罪に沈める此世に薔薇水の撒布をするだの云ふ譫言は聞えなかつた、人は刑罰廢止を思はず、神法の勵行を願つた、善と惡の相違は天界と

地獄のそれの如しと信じた、心の底から確信した、唯滅亡に向て急ぎつゝある此末世に至つて、善惡を混合して糖蜜を造つたり、ルソー的泣蟲主義、普遍的赦免及び慈愛など云ふ膏藥を煉り上げてわい騷ぎ立つて居るのだ、甘いけれども毒のある糖蜜で、クロムエルが夢にもこんな物を知らなかつたのは、末世に生れた我々よりも幸福であつた。

こんな物を頭と心から逐ひ拂つてしまつて、クロムエルの之等の書翰を見、此世に行はるゝ天の道に活きた眼を注ぐ人は、茲に貴むべき一圖を認るであらう、義なる神の兵士と自信して居る武裝せる一軍人が、峻嚴に、强烈に、神の敵に對して神の裁判を行ふ圖！喜ばしい圖ではない、敬虔と恐怖とを以て見るべき圖である、一寸見て直ぐ惚れるやうな畫ではない、汝はかゝる繪畫を愛するか、天よりの電光を見て「神聖なる光」と叫び得るか、汝自身の生涯が永久の深淵、久遠の光輝の中にあるか、汝自身も自己の立場に在りて神の正義の使者たりや、若し然らばオリヴーの行動を明瞭に判斷し得ん、然らずば然らじ。

オリヴーの文辭は粗雜で且舊く、一度は戰場にありて神の聲として彼に轟きしものも、今は解り惡くなつて居る、讀者が悉く明瞭に了解することは難いであらう。要するに平和なきに「平和、平和」と叫ぶ此僞善時代には、オリヴーの行爲の如きは認められ難いものである、何れ充分に認めらるゝ時代も來るであらう。

彼の軍事上の書翰たるや、實に粗雜な、巖の如く荒いものであるが、其中に意味あり、精氣あり、深みあり、彼は心に神の眞理を抱いて此亂れたるアイルランドに來り、左手に議會の法令、天地の大法を握り、右手に星光爛たる三尺の刄を携ふ、而して混亂せる民に向て曰ふ、「汝流血の民よ、見よ、我眞理を語り且行はんために來る、

茲に議會の法令あり、これ我等微力の清教徒が神の大法に象りて作りしもの、不完全なれども、我等其完成を期す、之に服從して之が下に靜平眞實を保たば宜し、然らざらんか、汝等の生命を斷つに劒あり！　二の一を選べ！」と。而して彼等は反抗を選んだ、クロムエルを信じなかつた、トリーダに於て彼等は彼の勸誘を斥けた、彼は城を攻擊し、約束通り鏖殺した、但し自己の兵にして奪掠をなすものあらば之を縊殺した、エクスフォードの守營も彼の勸誘を拒んだ故、同じく鏖殺を以て酬いられた、彼は口より出した語は必ず實行する、空言は吐かぬ、彼に於ては言即ち行である、彼は彼等に取つて眞の友なりしを、彼等は之を認めざりし也、哀れなるアイルランドよ！

まア、彼の書翰を讀むことにしやう、彼には物すごい憤怒があつた、が此憤怒は哀憐、愛情、柔しき涙を伴うて居た、峻嚴を伴はぬ優情は取るに足らぬ、先づ公道がなくては眞の愛憐はない、唯僞りの愛憐のみである。又トリーダの城にはイングランド人も大分居つたのに、「サクソン人の殘虐」などゝ云うて、人種的憎惡の影を傳ふることは、以後罷めるべきである。

（六）書翰第百〇三—第百〇六

トリーダの襲擊

次掲の第一の手紙は、第二、第三の手紙を讀むと能くわかる、第二第三の手紙で當時のクロムエルの措置の眞相を知ることが出來る。

書翰第百〇三

貴下よ、

余はトリーダの城將に勸降して慈悲を示したるも、彼は之に應せざりし故、彼等はかの如き災禍に逢ひ申候。

貴下もし之に鑑みて守營を英議會に引き渡さば、流血を免れ得べし、然らずして禍貴下に望むも、責は貴下にあるべく候、以上。

一六四九年九月十二日、トリーダにて　オリヴー・クロムエル

ダンドーク守將殿

ダンドークの守將は此書翰を受け取らなかつたのであらうか、ダンドークと其士官等の運命は後に明かである。

書翰第百〇四

貴下よ、

神はトリーダに於ける我等の努力を祝福し給ひ候、敵は三千以上にして頑強に抵抗し、初め我兵一千人突入せしも擊退され申候、されど神新たなる勇氣を我兵に賜はり、彼等は再び突擊して遂に敵を破り申し候。

我等は防禦者の全部を劍下に倒し申候、思ふに三十人と無事に逃れし者はなかるべく候。

實に驚くべき大恩惠に候はずや、敵は步騎三千の精鋭を、最良なる士官の下に、サー・アーサー・アシュトンを主將として、城砦に入れ置きしわけにて、七八個聯隊より成り居候、士官の無事逃れ去りしは唯一人のみなりとのことに御座候、之に由て敵の恐怖することと甚しく、此悲慘なる屠殺は、神の御慈愛に由て、以後の流血を大に救ひ得べしと確信致し居候。

此事一に神愛の然らしめし處、願くは之に由て神のみ崇められん

ことを、以上。

一六四九年九月十六日、ダブリンにて

オリヴ！・クロムエル

參議院議長ジョン・ブラッドショウ殿

書翰第百〇五

〔譯者曰、之はダブリン上陸以來の經過を下院議長に報じたるものにて、前半トリーダ襲擊の詳報を略す。〕

……かくて敵は遂に城を棄てゝ退却を開始致候につき、小生は之を鏖殺すべしとの命令を發し申候、小生も情熱せし折柄とて町に在りて武器を執る者は悉く殺すべき由命令致候、此夜我兵は二千人を殺せしことゝ存候。セント・ピーターズ寺の高塔其他二三ケ處に逃げ入りたる敵ありて、招降に應せざる故、小生は此高塔を焚くべき命じ申候。其他降伏せし數團の中、十人に一人を拔きて殺し殘餘の逃遁を許したるもあり、又全隊を無事去らしめたるも有之候（武器を剝ぎて）。

此事たるや、無辜の血に手を穢したる惡徒に對する大能者の正しき審判にして、將來の流血を防ぐものなりと信じ候、かく信じてこそ初て此行爲の合理を保し得べく、然らずとしては悔恨を生むのみにて候、此守營の將卒は敵軍の華と唱はれたる武勇の士にして、位置は守るに宜く人は慓悍なれば、我軍の必滅を信じ居たる次第にて候。

此戰勝の後、小生はダンドークに騎兵を送り、敵既に去りて守る人なき此城を占領せしめ、又他の一砦も我手に歸し申候、又トリム附近に蘇人の守り居る一守營へも騎兵一隊を遣りしが、蘇人はトリーダの戰報に膽を潰して大砲を殘して逃げ去り申候。

如何にしてかゝる戰捷を得たりしか？　大なる業は力に因らず聖靈に因るとは我等の覺悟せし處、此事洵に之を證して餘りあるべく候、聖靈我士に勇氣を起さしめ終に最後の勝利を得たり、唯神のみ光榮を有つ。

セント・ピーターズ寺に逃れたる敵一千人を攻めて劍下に倒し候が、此際混雜のため僧侶も全部及の錆と相成申候、我軍に在りては負傷者は多く候へども、死者は百を算せずと存候。

此征戰をして早く結了せしめんため、議會が我軍の維持支給に於て充分の考慮を致されんことを願申候、此點については現下こそ神の與へ給ひし最良の機會に候、大軍の維持は英國に取りて重荷と見えんも、現下の一奮發は以て戰禍の結末を早め申すべく、小生の此請求も無理には候はじ、もし神此戰を早く終らしめば、戰つて空しからずと申すべきか。

我等の中には病人も多く、新分子の注入を要し候につき、何卒歩兵數聯隊を新たに御派遣被下度候、既に我手に入りし守營を守り、又今後我手に歸すべき各守營を守るべき兵數を考へ候に、增援なくては我軍の兵數は減ずるのみにて候、以上。

一六四九年九月十七日、ダブリンにて　オリヴー・クロムエル

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿

トリーダの襲擊とはこんなものであつた、其內的意味を充分に悟らざるに於ては、其外形の强烈なる唯人をして反感を催さしむ、クロムエルは嚴肅且深刻に「大能者の正しき審判にて將來の流血を防ぐものなり」と云ふ、そして我等は之を事實なりと認む、此思ひ切つた遣方は實にアイルランド戰役の死命を制せりと稱すべきもの、

次のエクスフォード襲撃の獰猛と相並んで行はれて、而して其後はもう襲撃或は虐殺の必要はなかつたのである、狂暴を抑へるための一時の非常手段であつた、薔薇水の外科醫君には他の遣方もあつただらうが、それはオリヴー式ではない、オリヴー式をしてオリヴー式たらしめよ。

オーモンド侯はダンドーク、トリムの二城に市街を燒いて逃ぐべしとの命令を傳へたが、彼等はトリーダの戰況に眼を廻して市街など燒く暇もないと急ぎ逃れた、されば二つの町はそのまゝ新太守の手に落ちた、次に彼は大佐エナブルズに一二聯隊の兵を授けて、或方面に行かしめたが、其事は次の手紙に明かである。

書翰第百〇六

貴下よ、

カーリングフォード回復等の用務を帶びて、トリーダを出でたる大佐エナブルズより昨夜通信有之候。

彼はカーリングフォードに着して、開城を勸告せし處、三個の城と、港を扼する一個の壘とは彼に降り、火藥四十箱、大砲七門其他分捕品有之し由にて候。

エナブルズは更に騎兵一隊を率ゐ、歩兵の後續を命じてニューリーに進みしが、歩兵の來着以前、敵は勸降に應じて城を明け渡せし由にて候、其他二三の彼の報告に依るに北方地方の事甚だ味方のために好望にて御座候。

小生は此報告の參議院へも致されんことを望み申候、諸君が之等の恩惠に接して凡てを神の榮光に歸せんこと、これ生の神に祈る處にて御座候、何となれば彼のみが凡て之等甚大の恩惠の賦與者にて候。

軍は今夕ヰックロー郡アークローに止るべく、此地は當地より三四十哩隔り居候、小生も神恩により今日此地へ參るべく候、以上。

一六四九年九月二十七日、ダブリンにて

オリヴー・クロムエル

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿

エナブルズは北部を走り廻つて着々として功を奏しつゝあつた、一度夜襲に出つ喰はしたばかり、たいした損害もなかつた、クロムエルは此日ダブリンを出でゝ南方へ進み、更に大に新に爲す處あらんとして居る。

(七) 書翰第百〇七

エクスフォードの襲撃

貴下よ、

軍は九月二十三日頃ダブリンを出で、ヰックロー郡に入り、十四哩程進みてキリンカリック守營を降し、茲に歩兵一大隊を殘し、更に進みてさながら無人の野を行くが如く、遂にオーモンド侯爵家の最初の住所たるアークロー城に迫り候、此城は曾て侯爵の要害堅固にかためしものなるが、城兵は我軍の近接するや城を棄て走り候、因て此處にも歩兵一大隊を殘し申し候。

我等は更にエクスフォード方面に進み、途中の堅城リムブリックは我等の着せし前日城兵之を燒いて跡なく、尙ほフハーンズに進みしに、此城も亦レーノルヅ大佐の勸降に應じ候につき一大隊を止め申候、かくてスラニー河を超えて其夜エニンスコーシー村に入り、城に向つて降伏を勸めしも最初は應せざりしが、遂に城兵

は兵器彈藥を殘して城を去り申し候。

十月一日（月曜日）いよ〳〵エクスフォードに着き申し候、此地の守營は堅牢無比を以て自ら任じ居り、守將はデーヰッド・シノットと申す大佐にて候、味方の勸降及び敵の返答等凡て此際の交渉の顚末は別紙往返の文書之を示し居候。

〔譯者曰、此間に敵味方間の往復の手紙の寫あり、之を略す、要するに敵の降伏條件の全部には應じ難しと云ふクロムエルの最後の通牒に對して、敵方より返事なく、クロムエルが町を戰禍より免れしめんとの苦心も徒となりて、遂に戰は行はれたのである。〕

……敵は遂に城を棄てゝ町に走り入り、我兵之を追擊して町に入り、市場まで到りしに此處に敵兵は頑强なる抵抗を爲し、我兵は之を破りて逆ふ者を悉く刃にかけ申候、逃れんとして舟を爭ひ三百人は水に溺れ申候、敵の死者は二千を下らざるべく、味方は多分二十人を失はざるべく候、洵に我等は町の破壞せられず町民の生命財產の安固ならんことを念とせしも、神之を許し給はず、彼等の上に正當なる審判を下し給ひて、彼等が曾て無數の新敎徒に對して行ひたる慘逆を今碧血を以て贖はしめ給ひ候！　今日迄新敎徒が彼等より受けたる殘害は、聞けば聞く程むごたらしきものにて候。

我兵は澤山の分捕物を致し申候、もし町民にして前以て河の向側に品物を運ばざりしならば、分捕品は尙多かりしならん、携へ得ざる程の重き物は我國の用に差出すべく、鐵、獸皮、獸脂、鹽等甚だ多く有之候、其他砲銃船舶等あげて數ふべからず候。

此町は今英國の權內に立つ、住民の中再び住み得ん者は二十に一なるべく、大部は逃げ、殺されしも多く候、されば正直なる民の來つて此地に住まんことは甚だ望ましく、家もあり其他の設備も

あり萬事好都合にて候、交易の中心にして漁場としても好適、且要害堅固の地にて候。

かく神は又々恩惠を我國に賜はり申候、榮光唯一に彼に歸すべく、眞に薄弱なる兵力を以て、唯信念の力に由て、此事を成就したること、これ亦神の恩賜にて候、以上。

一六四九年十月十四日、エクスフォードにて　オリヴー・クロムエル

英國議會議長井ルヤム・レンサル殿

若きチャールズ第二世は、ヂャーシー島まで來り着いて、アイルランドに行かうと思つて居るのだが、多分此戰報を聞いて驚き躊躇ふことであらう、スコットランドでは既に彼を國王に戴いたが、何でも駝鳥でなくては呑みきれさうもない窮屈な條件を以て、身動きのならぬ程王を束縛したらしい、されば憐れなる王は何處へ行つたら宜からうかと大分まごついて居た。

此頃エヂンバラ邊では色々な風説があつた、やれクロムエルはアイルランドで大敗して戰死したとか、やれ洪水の如く向ふ所敵なき有樣であるとか、トリーダやエクスフォードで老若男女の別なく虐殺をしたとか、風説は風説を生む有樣であつた、此風説に依て或詩人がこんな歌を作つた。

クロムエルは死んだ、生きた、復た死んだ、
殺されて三度生き復へつた、
無理もない、地獄の使者だもの。
そして今度は我々を虐めに來る、
同じ樣に我々を苦しめる、
親友の惡魔から助言を受けて復一仕事する。

(八) 書翰第百八—第百拾二

ロス

エクスフォードはクーク大佐之を守り、軍は更にロスに急ぎ進んだ、ロスは舟の通へるバロー河の岸に立つ町で四周に壁を廻らしてある、十月十七日軍はロスに向て陣し、同日クロムエルは勸降狀を城に送つた。

書翰第百〇八

貴下よ、

余はアイルランドに入りし以來、城を攻むる際は必ず先づ先方の利益となるべき條件を提出して、城の明け渡しを請求するを常とし、未だ一回も突然攻撃を開始せしことなく、以て流血の慘を避けんと努め申候、我軍の訪ひし場所と其住民とに苦害を與へざるは余の主義にて候、(但し彼等にして片意地なる場合は自ら別にて候)。

此地と此住民についても同様の措置に出でんがため、ロス町を我手に渡さんことを茲に勸告致候。

一六四九年十月十七日、ロスの前に陣して

オリヴー・クロムエル

ロス城指揮官殿

之を城に送つた後攻撃準備を整へた、アイルランド軍の總大將オーモンドやアーヅ、キャスルヴン等諸將は河の對岸にありて、千五百の歩兵を援軍として城に入れた、敵將インチクインも二三日前まで城中にあつたと云ふ、十九日(金曜日)には英軍は砲撃を開始し

たが、城將より返答が來た、かくして數回の文書の往復があつて交渉を重ねて居る間にも、英軍は休戰せず時々砲擊を加へて威力を示したが、遂に協定成立して城と町は無事クロムエルの手に歸した、此地は重要な場所であり、又英兵休養の好地であつた、城中に在つた五六百の英人は例の如くクロムエル軍に加はつた、オーモンド麾下のアイルランド王黨も下らぬ主義のために死ぬより生きた方が宜からう。

〔譯者曰、書翰第百九、第百十、第百十一は右城將ルカス・ターフに宛てたる交渉の文書であるが、其內容に於て次掲の手紙と重復する故省く。〕

書翰第百十二

之はクロムエルが議長レンサルに宛てたるロス開城の公文通知である。

貴下よ、

我等はエクスフォードを去りて、バロー河上のロス町に來り申候、此町は七八百噸の舟の來り得る港にて候。

我等は十七日（水曜日）に大砲三門を携へて此地に來り、此夕勸降狀を城に送りたれど返答なし、彼等には二三日前步兵一千の增援ありしとか、翌日は砲擊の準備を致し候ひしが、千五百人以上の英人、蘇人、愛人、混合の援兵が河を越えて城に入るを目擊致候、オーモンド、キャスルハヴン、アーヅ卿は對岸にありて之を指揮致申候。

翌朝我砲兵射擊を開始せし處、城將より返翰來り、かくして交渉開かれ申候、敵は大砲を携へて城を去り度しと主張し、小生は砲と彈藥の引渡しを要求せしが、敵は終に我請求を容れ多大の兵器

彈藥を殘して城を去り申候、敵のマンスター州兵中に在りし大凡五百の英人は我軍に歸順致候。

此守營の陷落は我軍に休養を與へ、又マンスター侵擊に便ならしめ、寔に好時期に下りたる御惠(めぐみ)にて候、啻(ただ)我等は神が此憐れなる一隊を導き給ひつゝあるを信じ、彼の名のみ高められんことを願ひ、且人々が此御惠を受くるに耻ぢざる行動に出でんことを祈るのみにて候、これ生が熱願にて候、以上。

一六四九年十月二十五日、ロスにて

オリヴー・クロムエル

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿

追伸、ホートン大佐は流行病のため此頃逝去致候、大佐は純正勇猛の士、其功績の記念せられんことを望み申候。

憐れなるホートンよ、彼は自由公道のために盡す處多かりしが、遂に戰地の流行病に斃れてしまつた。アイルランド地方は、戰亂のために此以前より甚だしく荒廢して餓莩(がひやう)道に横はる有樣、疫病も亦烈しかつたのである、但しクロムエル軍には糧食の供給豐かであつたと云ふ話。

(九) 書翰第百拾三—第百拾八

トリーダ及びニクスフォードの擊破とロスの降伏とはアイルランド戰亂の主腦を碎いたのであつて、殘餘はアイルランド全體、殊に北西部によろ〳〵とひよろついて居るものゝ、間もなく鎭定と云ふ氣色を示した、此冬中マンスター州地方に於ける其往生際(おうぜうぎは)の苦みと、クロムエルの行動とを、次の六つの書翰が示すのである。

書翰第百十三

茲にまた家庭的の小さい閃きがある、此際荒野の花といふべきものである、メーヤーは十二月十二日ハースレーにて之を受取つたさうだ。

親しき兄弟よ、

甚だ多忙中ながら此機を失ふを好まざるまゝ一書呈し申候、小生は貴兄と御家族とのために毎々祈り居候、ディック〔リチャード〕は怠惰者なれば小生は彼より手紙の來るを豫期せず候へども、我娘〔リチャードの妻〕の破約は小生の大に怒る處なりと御傳へ被下度、彼女は之を償ふならんと存候。

エクスフォードとロスの攻略後、コーク及ヨオルの二城我等に降りて、神はマンスターに於て我等に大なる地歩を賜はり候、其他の小守營の降り來りしもの一々掲げ難く候、主の爲し給ふ處驚異すべし、彼の手のみ之等を成せり、願くは主のみ崇められんことを。

小生は近時甚しく健康を損じ候が、幸に支へられ居候、願くは御祈り被下度候、俗世の事に何の利かあらん！　小生は我息がキリスト被下度候、又我息が更に〳〵神の事について思ふやう御勸めにありて妻を愛し、彼女もキリストにありて良人を愛せんことを願居候、生も亦キリストにありて二人を愛し度く願居候。

御家族皆々様に宜しく御鶴聲被下度候、以上。

一六四九年十一月十三日、ロスに於て

オリヴー・クロムエル

ハースレーに在る

愛する兄弟リチャード・メーヤー殿

書翰第百十四

〔譯者曰、之は十一月十四日の日附で參議院議員トーマス・スコットに宛てたものである、之を略す。〕

書翰第十五

此頃水師提督ブレークは、其艦隊を率ゐてアイルランドの海にありて勢威を張り、陸上のクロムヱルと協力して王黨の火の手を消さうとして居る、王黨のラバート親王は叛艦の殘餘を以てブレークを避けてキンセール砲臺の掩護の下に隱れて居る、憐れなる親王は海上に逃れて彼方此方と彷徨の生活をなし、海賊然たる有樣——後間もなく艦をも棄てた。モーリス親王も矢張り海上の漂浪をやつて居たが、西印度邊で艦が沈んで人も鼠も一處に海底へ沈んでしまつた。

〔譯者曰、此手紙の譯載を略す、十一月十四日にロスより議長レンサルに送つたもので、クーク及びヨオルの開城等戰の狀況を報じ、終りに英兵の大部が病に罹れることを記して、援兵と軍資の送遣を乞うてある。〕

書翰第百十六

此手紙には日附がない、又認めた場所も記されて居らぬ、然し場所は文面により「ヲーターフォードの前」であると思ふ、日も十一月の二十五日（日曜日）であらうか。

〔譯者曰、此手紙の前半は各地の戰報で、其終りにヲーターフォード攻擊の模樣が記してある、複雜無味なる故略す。〕

貴下よ、此等の事について何を曰はんか？　此等をなしたるは肉の手なるか？　これ人間の智慧、力量なるか？　これ普主にて候、

かく思はざる人は神の呪ふ處とならん！　貴下よ、事は大能の指導に因りて爲され申候、神は人々の心を動かして我國の下に屬かしめ給ひ候、我軍の中には戰場よりも病院に適せる兵極て多く、敵も此事を知り居たるも如何ともする能はざりし次第にて候。

忠良なる人々の榮譽を神に歸せんこと願はしく候、政道に立つ人人の、此事に由て心情と靈魂に敎へらるゝ處多く、神に近より、高貴なる生涯を以て主を讃美せんことは小生の切願する處に有之、又我黨の人にあらざる各方面の兄弟が此大恩惠に由て神を讃美するに一致せんことを望み申候、家の父にしてかく惠み深きに、子供等の間に葛藤不和のあるは何の態ぞ、此勝利は神が英國今回の政變を嘉し給ふ證據なりと認められざる迄も、願くは萬人をして此勝利も彼政變も共に神の正審判にして且偉業なりと認めしめよ、神は誇れる者を引き卸し、無辜の流血に應返へしめ、其敵を粉碎する者なることを認めしめよ、我等は國の安寧平和を求めんと欲するもの、彼等も亦之を求むる心を主より賜はらんことを祈り候、

以上。

一六四九年十一月——日、ヨーターフォードの前に陣して

オリヴー・クロムエル

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿

書翰第百十七

議長閣下、

前便後間もなく、天候甚だ騷暴を極め居り候理由により、我等は冬營地に退きて、神が活動の機を與へ給ふまで、兵の休養をなすことに一決致し候。

我等は本月二日ヨーターフォードの圍を解いて退き申候、小生は

未だ嘗て此日の如き天候の惡しき日に、行軍したること無之候、此朝敵營に二千近くの步騎兵の增援ありたるを我等は認め申候、此日はダンガーヴンより八哩を距てたるキルマックトマスまで進み、翌朝此處を去りたるに、ブロージル卿より騎兵の一隊來り會し申候、其報ずる處によれば卿は近頃ダンガーヴンを降し、二三千のマンスター兵を從へて十哩程離れたる地に居る由にて候。神は之等の吉事を以て恩惠を垂れ給ふ間に、其知慧と測り難き聖意とを以て一事を起して、我等をして聖意如何を眞摯に探らしめ給ひ候、願ふ我等の聖意を知りて之に任せ得んことを、そはかの高貴なる中將（マイクル・ヂョンズ）が遂に熱病の犯す處となりて苦悶數日の後斃れたる事にて候、彼が生前の勇氣と高節と忠良とは、小生が申す迄もなく其行爲之を證し候、英國の損害實に尠少ならじ、生も亦高氣き友、働きの伴侶を失ひ申候、實に神の我等に與へ給ひし苦き杯にて候、まことに我等は目下狂亂の隊にて候、されど我等は神の前に生き、神の命じ給ひし時の間働き、其後は靜肅に休むべく候。

さりながら苦き杯の底には甘味のあるものにて候、敵はバロー河畔の我壘を取り返へさんと企て、少將フェラルはヲーターフォードより進み出でたりとの報に接し、小生は大佐ザンキーに味方の救助を命じ申候、大佐は途上小敵を驅逐しつゝ壘に達したるに、壘は大軍の敵勢に圍まれ居たれば、大佐は直ちに戰ひて遂に之を驅逐致し候、捕虜三百五十を數へ候中に、少佐オッヂール、變節漢ワガン（大佐にしてダンカノンの守將）其他士官多く候。此大勝を得るについて、味方には唯一人の負傷者を出したるのみにて候、敵の少將フェラル間もなく來援したるも、忽ち見苦しくも退却致し、ヲーターフォード城に入り申候。

目下の狀況にては尙々攻戰は續き候はんが、我等は攝理の御手にのみ從ふ覺悟にて候、神其恩惠を以て我等が攻戰の期間を短くし給はんことを誰か望まざらん、此外に小生の望みなし、又努力なし、以上。

一六四九年十二月十九日、コークに於て　オリヴー・クロムエル

英國議會議長井ルヤム・レンサル殿

愛軍の總大將オーモンド侯は、此敗戰をヲーターフォードの或高處から看て居たそうだ。

「變節漢ワガン」と云ふのは曾て議會軍の將たりしに、一六四八年例のハミルトン軍に參加し、其後大膽狂猛を以て名を著した男である、彼は幸にも此時茲で殺されずに濟んで、四年程後ハイランド地方に蜂起したる新蘇國叛亂に加はつて有名となつた、そして間もなく世を去つた。

此書翰が議長の手に屆いたのは一月十八日のことであつた、此頃は冬期の郵便は此位手間のとれたものであつた、此日議會では、クロムエルの歸國して議會に出席することを要求することに決し、議長レンサルは此旨をクロムエルに申し送ることになつた。

クロムエル召喚の理由はかうであつた、此頃チャールズ第二世がスコットランドへ行くと云ふ噂が次第に確實となり、蘇人が王の爲に兵を擧ぐる企圖は大に議會を驚かしたので、議員の或者は大將フエヤフアクスに蘇國出征の急を說いた處、大將はこんな事には一向冷淡であつて、彼は頑固な長老派信者であつた其夫人に御せられて、寧ろ蘇國に好意を有して居る事がわかつた、そこで議會では、クロムエルの冬營地に退きたるを好機として、彼を召喚したのである。

愛爾蘭太守（クロムエル）は直ぐ此召喚に應じやうと思つたが、蘇國の事情未だ尙ほ急ならざるに、愛爾蘭の事未だ鎭定に至らざるを思うて、尙暫く猶豫することにした、彼はマンスター州に於て、否アイルランド全體に於て尙ほ爲すべき多くの事があつた、——此手紙がレンサルの手についた少し前、彼はフィリップ・ホチートン卿に次の手紙を送つた。

書翰第百十八

ホチートン卿は、此前はダービーハウス委員會に居て忙しい人であつたが、目下は參議院に列して居る、彼は今事に關はるを已めて大に懷疑躊躇の中に居る、〔譯者註、彼はクロムエル等の行動について喜ばぬ處があるのである〕、熱烈なる淸教徒で愛國者なる彼も、あまりに考へ過ぎて憲法論とか何とか云ふ理論の中に頭をつき込んで、大に迷つて居るのである、彼のやうな種類の人は當時澤山あつた、憤然として劍を案して起ち、何等疑ふ處なくして猛然として戰ひたる民黨の勇士が、今は自分等が奮戰の生みたる結果を見て少しく意外の感に撲たれて居るのである、王の處刑、上院の廢止等の高手的行動が果して神の嘉し給ふ處なるか如何等の疑惑を抱いて居つたのである、クロムエルは茲に充分の友情を以て、ホチートンの疑惑を解かんとする。

我親しき友よ、閣下よ、

小生は貴兄を眞に愛する者、愚かしくも想像の上に立ちて二三申上ぐる處あるも、これ一に僞りなき愛のためなりと御宥し被下度候。

手紙を以て貴兄の疑惑について論述し、御抗議に答へんは空しきことにて候、御疑問の筋々についても充分考察致し候が、幸に自

己一身に於ては何等疚しき處なきを感謝致し居候、我等もし餘り個々の出來事に囚はれ候節は、神の大なる所業を疑ふことに相成候、議員について、「此九年間善き者は除かれ最も惡き者のみ殘る」との批評有之候由、されど此九年間に神の爲し給ひし處如何、大事は尙續きて動きつゝあり、此誹謗を警戒せられよ。

「神の所業」の方法に心を痛め給ふ勿れ、恐らくは他に方法なかりしならん、神ピチハスの熱心的行爲を嘉し給ひし如く〔民數紀略廿五章六—九參照〕、もし理性に依る法律論よりも熱心による高手的手段を承け給ふとせば如何、卿にして此「熱心」を神の嘉し給ふことを、外的事實により又善人の胸底に應じて、見給ひしならば如何、貴兄の神の業より退き給ふを小生にして虞れなば如何、——おゝ他人の誹謗のため、誤れる推論のために、兄の此擧に出づるは悲しとも悲しく候。

「此遣方は宜しからず、他の遣方に從へば充分の滿足あり」との抗論も、「滿足」といふことだけを第一とせば宜しく候へども、とかく「安全」「利益」等の考慮を伴ふを如何せん、之等考慮は我等の歩む行程に霧を散らし暗黑、「不滿足」を生むものにて候、おゝ我等の欺き易き心よ！　おゝ此詔諛の世よ！　神の爲し給ふ中の最劣なるものも此世の爲す最上より優れたり！　我等推理に由て主の用を發見せんとするは難し、むしろ主の用と信ずる所に身を投ずるに如かず候。

卿の我等と行動を共にせんこと願はしく候、さりとて我等は今連戰連勝には候はず、此後も肉の惱みは多かるべし、神我等を導き給ふ、兄が他黨と結ばざる限りは、兄の心は兄の憐れなる友人等〔クロムエル等〕に眷戀することは生の疑はざる處、而して兄が他と結ばんことは、我等は賤むべきものなりとも、神許し給はずと

信じ申候。

御家族、御親戚が兄を誘惑して過ちに陷らしむるものたらざらんことを願ふ、恩惠は誘惑たらしむべきものにあらず、されど我等は屢々之をなすものにて候、神大兄を導きて聖意に從はしめ眞理の中に平安を與へんことを祈る、君の眞實なる友のために御祈り被下度候、以上。

一六五〇年一月一日、コークにて

オリヴー・クロムエル

ホチートン卿殿

追伸、小生は、主にありて熱情を以て愛する友なるロバート・ハモンドより來翰に接し候が、其手紙はいたく小生を悲しませ申候、生はその手紙の全精神が彼が誘惑に陷りし結果ならざるかを恐れ居候、されど神彼の誤謬を正し給ふならんと信じ居候、小生は彼に手紙を認め度く候へども何分目下其機なく候、あゝ小生は暫時なりとも親しく彼と會談致し度く候、多分彼に害を與ふることはなかるべく候。

ホチートンと其「疑惑」については（此疑惑を抱くものは澤山あつた）、我等後に尙ほ記す處あらう、ホチートン、若きハモンド大佐、若きモンテーグ大佐、トム・エストロー、ヘンリー・ロオレンス等の推理的疑惑、及びセーント・ヂェームズ公園に於けるクロムエルとの會談については間もなく述べやう、中には後、充分の「滿足」を得たものもあり、又然らざる者もあつた。

（一〇）愛爾蘭太守宣言

欺かれたる人民を醒まさんため

當時アイルランドには「キルケニーの最上會議」と云ふ貴族僧侶等の會があつて羅馬公教の立場に立つて種々の畫策、命令、實行をした、歴史上から見ては、何やら更に譯のわからぬ一團で、まア朦朧たる瘠こけた影のやうな者だ、そして其結果は大體より見て「虚僞」であつた、其中に愛爾蘭的愛國心の閃きもあり、人間の勇氣の輝きもあるが、何分にも狂暴、殘忍、憎惡、喧噪、虚僞を特色としたので、とう〳〵クロムエルの出現を必要とするに至つたのである。

クロムエルのために彼等の愛爾蘭叛逆は將に蹂躙し去られんとしたので、彼等は茲に諸分派合同の必要を感じ、過ぐる十二月（一六四九年の）四日に僧職連の大會合をクロンマクノイズと云ふ處に開いた、そして三週間も會議を續けたといふ。

此會議の結果は諸派の大合同となつて現はれたが、まことに上皮だけの淺い合同一致で、一ヶ月もたゝない中に破れてしまつた、しかし、此時彼等のアイルランド人民に對して發表した告文をクロムエルが見て、之に應ずべく次の宣言を公けにしたのである、一の太守の發表した公文でこれ程著しいものはあるまい、よく〳〵之を讀んだならば、昔のまゝの眞實と聖なる熱火は輝き出でゝ、我等凡てに多少の益を與ふるであらう。

此僧職連の告文と云ふのはつまらぬものであるが、其大意だけ一寸申上げやう、第一には、今迄羅馬公教界に分派があつたが以後一致合同すと宣言してあつて、之に二十人餘の監督の署名がある。次には、之等監督より一般の僧俗に種々の注文がある中にも、目下國を犯しつゝ居る「怠惰小供等」Idle-boys〔クロムエル軍を指す〕の鎮壓のため、國中の祈禱の要求せられて居るなどは面白い。第三には、イングランドは愛爾蘭人の半ばを虐殺し半ばを海外へ流謫して、全

く其跡を斷たうと計つて居るのである故、決して其甘言に欺かるゝ勿、全愛爾蘭人は貴賤貧富の別なく來つて「大合同」を扶けよ、此儘にては虐殺か放逐の外なしと記してある、クロムエルは重に此第三の言に憤を發したのであるが、全體についても充分駁論して敵の妄言を痛快に擊破して居る。

欺かれ誘はれたる人民を醒まさんための愛爾蘭太守の宣言——光明に眼を閉ぢざる者には滿足を與ふる宣言

——クロンマクノイズの會議に於て愛爾蘭羅馬公教監督僧侶に由て近頃發表せられたる宣言に對する返答

クロンマクノイズの會議に於て作成せられたる、羅馬公教の監督僧侶の宣言に對して、余は簡單に答ふる所あらんとす。

彼等は各自の間の相違を棄てゝ心より「一致」せりと云ふ、又此戰たるやアイルランドの教會のため、國民のため、陛下のためなりと主張せり、果して然るか。

彼等は、靈的會議の開催は俗權の干渉を受けずと主張しながら、却て決議を作りて俗事に干渉するは何の故ぞや、識者ありて若し彼等の所謂「一致」なるものゝ眞相と目的を知らば、頗る之を輕視するならん、且彼等は何等人民に計る處あらずして、人民をして己れ等に同意せしめんとす、愚ならずとせんや。

彼等は「僧俗」の一致和解と云ふ、僧俗（Prelates and Laity）と云ふが如き區別的、反基督教的の語を用ひて一を高しとし一を低しとすればこそ、其間に「和解」を要する程の「分離」「相違」を生ずるなれ、「僧」と云ひ「俗」と云ふ、これ僞基督教會にのみある語なり、眞の「一致」のありし時代の教會には「兄弟、信仰の同じ家に屬する聖徒」の語あり、職責の相違はありたれど「僧」と云

ひ「俗」と云ふが如き區別的術語なし、此語を生みしは卿等（僧侶に對して曰ふ）の驕慢なり、此區別を保つは貪欲のためなり、即ち人民をして僧職を潔しと思はしめ、其聖潔を購はんとして金を出さしめんがためなり、又自由に人民を駕御せんがためなり、古の律法學士及びパリサイ人の如く、律法を人民に知らしめずして、「律法を知らざる此衆民は罰すべきものなり」と言ひて誇らんがためなり。

余は卿等〔譯者註、以下凡て僧侶等に對して云ふ〕の「一致」を恐れて此言をなすに非ず、卿等の一致はシメオンとレビの一致の如し〔創世紀三十四章〕、「結べよ、汝等碎かるべし、互にはかれ、つひに空しくならん」、我等は神の我等と共にあるを信じて疑はず。卿等は「共通の敵」と叫ぶ、英人を指して云ふならん、僞善者よ、曾てアイルランドはイングランドと結び居りしにあらずや、二國間に平和融合ありしにあらずや、然るに卿等は自ら此融合を破りたり、卿等は英人に對して、天人共に宥さゞる古今未曾有の大虐殺（老若男女の別なく）を行へり、而もこれ、何等英よりの挑戰なく、非行なき昌平の時なりしに於てをや、「平和のため」と高唱し、「共通の敵に對しての一致」と驕呼する卿等に由て、此大惡事は使嗾（しそう）せられしなり、かくても尙「神は我等の側にあり」との我言は誤れりや。

卿等は曰ふ「我等大監督、監督、高僧は慈に一致結合す、而して教會の利益及び特權のため、各監督、僧侶の名譽、威嚴、領地、權利、及び所有物のために我等は一體として立たんとす、又國王の權利を進め、國民の利益を增さんとす、我等の一人たりとも、分離し、又は全體に向て反對するを免さず」と。

教會の利益のため僧侶の利益のために、國民を戰亂の中に投ぜんとす、何ぞ過てるの甚しき、卿等の戰はんとするは所謂「教會稅」のためなるか、教會の收入のためなるか、これ卿等の管轄權なるか、教會の權威施行なるか、或は卿等の教會の信仰のためなるか、何れにするも擧戰の理由として不合理ならずや。

所謂「教會收入」のためならんか、これ焉ぞ爭鬪の理由たらしむべけんや、パウロは「働く者の其給料を得るは宜なり」とは云ひながらも、自らは天幕製造に衣食して教會よりの支給を厭へり。

――「教會の權力、管轄權」云々を叫ぶが如きは愚も亦甚だし、キリスト曰はずや「されど汝等の中にては然すべからず、首たらんと欲する者は凡ての人の僕とならん」と、彼は寔に「人を役ふためにあらず却て人に役はれ」んために來りしなり。

教會の信仰、教義のために戰ふと云ふが如きは尙過てり、これ恩惠に依り聖靈に源するもの、何ぞ劍を以て爭ふべけんや、「聖徒が一度傳へられし信仰の道のために力を盡して戰はんことを」（猶太書第三節）勸めし人は、又カイン、バラム、コラの精神を避くべきことを（同第十一節）說き、「その德をいと聖き信仰の上に建て」（同廿節）よと曰ひたり、何ぞ劍戟を借りて爭ふべけんや。

「陛下のため」と卿等は叫ぶ、陛下とは何れの陛下ぞ、佛蘭西か、西班牙か、蘇國か、卿等の或者は西班牙王をアイルランドの主權者に推戴せんと企てしとか、蘇國王は小に過ぐるがためか、或は其宗教に於て充分卿等と一致せざるがためか、卿等は彼（チャールズ二世）に滿足せざる時は、忽ち他の「陛下」を求むることは易々たらん、卿等は曾て彼の父王が餘りに卿等の要求に應じ過ぎたるため、之を排したり、然るに今にして其子を「陛下」と呼ぶ、矛盾も亦甚しからずや、子或は父よりも尙多く卿等と一致せしか、

さる事あらんや、要するに卿等の「陛下々々」と叫ぶは一時の便宜のみ、必ずしも蘇國王チャールズのためにはあらず、誰人にても宜きなり。

卿等は又「人民のために」と最後に言ひたり、否申し譯に附け加へたり、あゝ憐れなるは「俗人」(僧職に對して)なる哉、卿等の王と卿等の教會とが多年實行せし例を踏みて、卿等と卿等の王は茲に復た人民を駆御し人民を驅使はんとす、然れども、今や世は政權、教權の二重の壓迫を知り始めて、之を振り落さんと目醒めたり、既に兩者を振り落し得たるもあり、「人民は王と教會のために存し、信徒は法王と僧職のために存す」との卿等得意の論は、今や粉碎し始めたり、恐らくは「人民」は卿等の思ふほどに動かざるべし。

さりながら、卿等は人民をして「人民のために戰ふ也」と信せしめんとするが故に、余は卿等の欺瞞を明かにして、彼等をして余に信頼せしめんと欲す、これ余が此公示の第一目的なり、されば余は卿等の宣言に載する處を悉く答ふべし。

卿等の錯雜せる宣言の内容を順序正しく云へば、卿等は人民の危險に瀕せるを警告して、其危險を説明せるが、其第一は羅馬公教絶滅の危險、第二は生命の危險、第三は財産の危險なりとなすものゝ如し、而して此等危難を避けんがために第一に議會軍總指揮官に欺かれざることを注意し、第二に戰爭に出づることを勸め、第三に多少の僧職授任をなせり、而して之等の面倒を見るは一に「羊に對する牧者の關係」によるとせり。

卿等は牧者を以て任じて自ら高しとし、人民を羊と稱して差別見に執す、卿等は國人を恐ろしき叛逆に入らしめ、ために國を荒ら

し人を殺し、尚且彼等を呼びて我羊群となすや、卿等は彼等を養はず、其有害なる僞基督教的教義及び實行を以て彼等を毒す、卿等は彼等に神の眞理を隱して、無意味なる階級及び所傳を與ふ、卿等の「羊群」は信仰の事につては毫も考ふる處なく、之を教會に任せて平然たり、彼等は少しも活ける信仰を傳へられず、かくても尚彼等は「彼等の宗教を失ふ」の危險ありや、失ふ程の物を所有し居るや。

第一に卿等は「羅馬公教絶滅」を我等の目的の一とすれども、これ全く事實に反したる斷定のみ、我等の此國に入りしは、卿等が叛逆して英の主權を振り落さんとせしがためなり、我等がエクスフォード、ロス、トリーダ三城砦の攻略に於て、卿等の言ふが如き何等羅馬公教滅絶の行爲なし、此國の人民が如何なる信念を抱くとも、我等は之を左右する能はず、唯愛心と忍耐とを以て彼等に對し、神が彼等により善き心を與ふるの日を待たんのみ。

第二に我等は「此國の住民の生命を害ふ」ものなりとの推定なるが、彼等は（クロムエルは今は人民を對手として語り僧侶を第三者として第三人稱にて呼ぶ）之が理由を一も示さず、唯漫然之を云ふのみ、理由を有せざるか、或は理由を擧げずとも人民は彼等の斷定を其儘承け入るゝと想へるならん、彼等は我等が「普通人民の根絶を希圖す」る由を言ひ、「羅馬公教徒を虐殺し追放せずしては、羅馬公教絶滅は行はれざるがためなり」と叫ぶ。

普通人民は卿等〔再び僧職等に對して曰ふ〕の所謂憐れなる「俗人」にして、羅馬公教の何たるかを知らず、然るに此人民が卿等の教會の利害と羅馬公教の存亡とに大關係を有するにや、彼等無くば羅馬公教は亡ぶるにや、卿等は然か思はざるなり、卿等は自己のみを以て羅馬公教の柱石となし、普通人民は壓制政治に服し

卿等に盲從する限りに於て、之に役立つものとなす。

卿等は曰ふ、英人の目的は羅馬公教絶滅にあり、而して之は羅馬公教徒を殘害せずしては行はれず、故に人民の虐殺を謀ると、卿等の宗教が眞のものにせよ、僞のものにせよ、我等は此人民を除くの必要は少しもなし、もし眞の宗教ならんか、今は既に墮落したるものにて（余は敢て云ふ、これ羅馬教會に誘惑されしため也）敢て人民を害ひて之を滅ぼす要なし、又僞の宗教ならんか、之れが絶滅を計る程の値なし、我等宗教の變換を欲すとするも、敢て虐殺追放の手段に訴ふる要なし、唯聖書あり、而して足れり、これ人道と善生涯と異說者間の信義を生むの書なり、此「信義」を我等此憐れなる民に對して行はんとす、唯卿等彼等を使嗾して戰場に出でしめ、以て我等の好意を受けざらしめんとせるのみ。

卿等は「虐殺、殘害、追放」と號呼すれど、我等此土に入りし以來、武器を執らざる者を一人たりとも不合理に殺したる例はなし、追放云々の批難に對しては、余は最も之に關する處深き人民一般に對して云ふ所あらんとす。

問題は生命毀損又は追放にあり、さて前者について云はんに、余は此國の民が法に背きて法の命ずる審問に依る場合の外、其命を奪はず、又部下をして奪はしめず、追放は、之を今日まで戰鬪に從ひし者の中死に該當する者に對して行ひしのみ、されば余は茲に宣す、人民にして僧侶等に使嗾せられて武器を執らばいざ知らず、然らずば殺害又は追放に逢ふことなしと。

第三に「人民の財產を毀損す」との批難あり、卿等は曰ふ、英軍は、アイルランド人の財產を沒收して、此地に英人の殖民地を起さんことを目的として侵入し來れるもの、今暫く人民の財產に對

して寛大なるが如けれど、之は一時の策略にして、戰勝後悉く之を奪ふ目算なりと。

卿等は英軍がかゝる目的にて渡海し來れるものとなすや、幾百萬の費用を掛けて、僅かに數十萬の金を出す土地購買者を求むる程の迂愚を爭(いか)で爲し得んや。――余は茲に我軍渡來の眞因を語らん、イングランドは、正義公道を貫かんとする時は、犧牲危難は多くとも、必ず大能の援けあることを度々經驗せり、我等は正義公道のために來れることを信じて疑はず、我等は、我同胞の此國にて罪なくして殺戮せられし理由を質(ただ)さんために來れり、英國の主權を振り落し人間社會の敵として立つ彼匪徒の一群を、破らんために來れり、神の援助により、此國に英國自由の光輝を放たんために來れり（英國は此國にて此事をなすの權利あり）――もしアイルランド人にして卿等の如き誘惑者の言に從はずば、此自由に與りて英人と等しき幸福に沐浴するを得んなり。

原著者註、此場合の「自由」の語はアイルランドの味方を大に驚かすことであらう、然り、之は近世の人が輕佻に用ひるあの「自由」とは違ふ、クロムエルは「天の正法に對する嚴重なる服從」の意味に於て自由の語を用ふるのである、天の正法とは永久の眞理の上に立つ法である。

余は尙人民一般に向て一言して、以て其適從する所を知らしめん、もし曾て武器を執りし者にして、今降參して其事情を英國に明かに訴へなば、英國は充分に之を審議して寛大の處置を取るべしと信ず、今武器を手にせる者にして、英國に降りて將來の臣從を誓ひなば、其叛逆の主導者にあらざる限り、同じく情深き待遇を受けん、又兵卒にして武器を棄てゝ家に歸り、靜肅に業に就かんと思ふ者は、隨意に然かなすべし、然れども尙頑として戰場に出づる者は、天の刑罰を受くるの外なし。

此叛亂に關係せざりし貴族、紳士、人民は法律の與ふる生命、財産、自由の保護を得ること確實なり、又農工商等各種の職業に於ても同樣の保護を受けん、彼等は正直、平和の民にして、常に英國に對して好意を表し來りたれば、英人同樣の待遇を受け、同じ割合の租稅を負擔すること丶ならん、又もし我兵にして彼等を虐遇せんか、確證擧がりなば最も嚴重に之を處罰すべし、彼等は全く英人同樣に保護せられん。

余既に上述の言をなし、之を實行せんと欲す、もし此國の民にして僧職等の言に從はんか、如何なる慘害破滅臨むとも敢て關せじ、余は喜んで峻嚴の態度に出でん。

此公示には日附も署名もないが、自分は研究の結果、一六六〇年一月十五日以後にヨオルにてクロムエルが起稿し、廿九日にコークにて印刷に附せられたものと推定する、(此日、軍は冬期休養を終つて再び出陣した)――げに著しき公文書なるかな。

(一一) 書翰第百拾九―第百廿一

議長からの召喚狀は未だ到着しないのに、其噂は既に傳はり來たり、敵は之を好機となして更に新運動を開始せんとす、我クロムエルは二月の(一月末よりの)空が例になく晴れ渡つて居るを好機として、再び戰場の人となつた、あはれな愛爾蘭人は互ひに破門しあつたりなどして紛擾(たゝ)をやつて居る、オーモンドはチャールズ王を招かうと手紙を書いて居る、例のキルケニーの「最上會議」は叫喚の聲を發して居る、今はクロムエルの好機(とき)だ、二月の空の晴れて居ること！

書翰第百十九

〔譯者曰、此手紙は英軍が冬營より出でゝロッグヒル、フェサード、カラン等の攻略をなしたことの報知で、議長レンサルに宛てゝ二月十五日カスルタウンより發したるものである、彼一度軍を率ゐて出づるや到る處風を望んで降る有樣を知るに足る、其譯載を省く〕。

書翰第百二十

英國博物館の書類の中に、「オリヴーのアイルランド征討物語」といふ稿本があるが、處々缺損して居て極て斷片的である故、餘り役に立つ材料ではない、然し、いつかは俗好事家諸君の手にかゝつて印刷に附せられることであらうか、但し次の二の書翰が其中に出て居るが、之は他の書にはないもの故、保存する値があらう。

貴下よ、

此處まで進軍致し候に付、例に依て條件を提出して降伏を勸め申候、貴君等は荷物、武器、兵器を携へて城を棄て去るを得べし、我等もし砲擊の已むなきに出でんか、貴下等の慘害は甚しかるべく候。

流血を避けんがため敢て此書を呈し候。

一六五〇年二月二十四日、カハーの前に陣して

オリヴー・クロムエル

カハー城守將殿

此城砦の運命如何は次の手紙に明かである。

書翰第百廿一

貴下よ、

……神は尚英國の利を增進し給ひ候、スューア河中の一島の巖上に立つカハー城は、一兵をも血塗さずして我手に歸し申候、キルチナン城も亦我に一の死者なくして陷り申候。

我等は亦スューア河上金橋の城砦をも奪取したるが、此際味方六人を失ひ申候、我等はリメリック郡にも味方の城砦を澤山有し居候、かくして不日敵の勢力衰へ候事疑無之候。

一六五〇年三月五日、カシュルにて

オリヴー・クロムエル

參議院議長ジョン・ブラッドショウ殿

(一二二) 書翰第百廿二—第卅二

ヘンリー・クロムエルやブロージル卿抔はリメリック郡にて大に敵を窘迫して居り、其他の大佐もあちらこちらで、愛軍を苦めて居るので、敵はキルケニーに逃れた、一度キルケニー陷らば、敵は此夏はもはや活動出來まい、そこでクロムエルは三月廿二日（金曜日）キルケニーに來り、其夜直ちに例の勸降狀を城に送つた、其成行は次の通り。

書翰第百廿二

〔譯者曰、之はキルケニーの城將、市長、市參事會員に宛てた開城勸告書である、譯載を略す〕。

キルケニーには守將が二人居た、一人は市の守將、一人は城の守將である、其外に市長、市民、市吏員あり、又例の「キルケニー最上會議」の殘黨たる僧職連も居た、此人々は、此勸誘狀に對して何

とか返事せねばならぬと騒ぎ立てた、翌朝市の守將サー・ヲーター・バトラーは偉らい決心で（少くとも偉らい顔と偉らい聲で）答へ來つた、此答は「陛下のために此市を死守す」と云ふ趣意の極て簡單なものであつた。

茲に於てクロムエルは砲陣を布く地點を選定することになつて、念のため更に明細に開城條件を言ひ送つたが、此手紙は今遺つて居らぬ、此手紙に對して月曜日の朝、守將は「不名譽の條件の下に降伏するよりは寧ろ城を枕として死せん」と强硬に拒絶して來た。

されば月曜日には、僅つた三門しかない大砲で砲擊を開始することになつたが、先づ次の返書を守將に與へた。

書翰第百廿三

〔譯者曰、之は交渉斷絶を通知しやりしものである、之を略す〕。

守將バトラーはクロムエル軍の砲擊開始に驚いてか、急に自分の開城條件を列擧して、條件によつては城を開け渡すと云ふ意志を表し來つた、且此條件交渉中の戰鬪行爲中止を要求し來つた。

其條件が甚だ手前勝手のものである故、クロムエルは構はず砲擊して、城壁の一部を破つた、又別の側からは、大佐ユーアーが一千の兵を以て市を攻擊せんとして居る、市の方からは條件を更めて協約を乞ひ來つた。

書翰第百廿四
書翰第百廿五

〔譯者曰、書翰第百廿四はクロムエルより守將に宛てゝ、其提出の條件の全部には應じ難き由を申し送つたものである、又第百廿五は市長に宛て交渉不調を通知しやりしものである、譯載を略す〕。

攻擊の合圖は下り、破隙より突貫せし隊は成功しなかつたが、ユーアー軍は市の一部を占領してしまつた、さア之からトリーダ以上の猛襲が行はれることであらう。

キルケニー市長ジェームズ・アーチダキンはクロムエルに返書を認めて、守將より提出せし條件を適當と認ることを告げ、且休戰の上交渉を開始せんことを願ひ來つた、之に對してクロムエルは答へた。

書翰第百廿六

貴下よ、

神の攝理を感じ悔いて我軍に服せんとする者に對しては、余は愛憐を表さゝるを得ず候、貴下及び貴下等市民にして此態度に出づる上は、余は貴下等のため益々寛大の處置に出づべく候。

市の住民の位置に關しては、昨日守將まで申送りし點を彼は貴下等に傳へしことゝ信じ申候〔譯者曰、書翰第百廿四に於て、市民は守備隊と一致行動を取らざるを宜しとすと勸告せしことを指すか〕、其後神は我等の占領區域を擴げ給ふて、我等は益々有利の地に立ちたるも、市にして我軍に降る上は、余は市に對して有利の處置を取るべく候。

余は市の奪掠に遭ふことを悲むが故に、我兵士に向つて、後に市民より金を出さしむべければ襲擊の際は奪掠を働く勿れ、もし奪掠する者は死罪に處せらるべしと既に告示致し候、されば市民にして守兵を助けて抵抗することなき限り、余は神助に依り、飽くまで此事を守るべく候、余は兵力を以て襲ふよりも、降伏を勸めて平和の中に事を終へんと欲する者、以て余が住民の劫掠に逢ふを救ひ、無辜の血を流さしめざらんと努むることを知られ度候。

願くは熟思以て最善の決意に出でんことを。

一六五〇年三月廿六日、キルケニーの前に陣して

オリヴー・クロムエル

キルケニー市長殿

市長からは降伏を勸められ、ユーアー大佐からは威嚇され、運命の神からは迫られて、守將バトラーの獅子吼も大分柔いで來た、廿六日彼は降伏の意志を表し、開城條件協定のため委員の任命と談判中の休戰とを乞ひ來つた。

書翰第百廿七〔譯載を略す〕

書翰第百廿八〔譯載を略す〕

クロムエルは大體に於てバトラーの申込を承諾して、其由を申し送つた〔書翰第百廿七〕。バトラーから細い打合せがあつて、クロムエルは之に返事を送つて〔書翰第百廿八〕、愈々兩方の委員が市の一部に會して談判を開始することゝなつた、此談判は二十七日の午後に行はれた、先方からは、四人の協定委員が市の守將と城の守將が署名した委任狀を携へて來た、無事に談判は決了した。

市も守營も全く降つた、市は某日までに二千磅の償金を出すことになり、それまで委員の中二人は英軍に人質となつた、守兵は、軍人の體面を維持して步武堂々と此處を出づることになつたが、市を離るゝ二哩にして武器一切を棄てねばならぬ（但し、王黨に對する防衛のため百挺の小銃と百本の槍だけを許された）、かくして彼等は去つた——さうしてキルケニー攻圍は各派（みんな）に都合よく濟んだ、記者と讀者のためにも都合よく茲に濟んだ。

書翰第百廿九

〔譯者曰、此書翰は些事に關したもので寧ろ省く方が宜いと思ふ故、其說明と共に略す〕。

書翰第百三十

議長閣下、

カハー略取以來、曾て一度議會軍に働きし者にして此度敵に加はれる大佐以下の士官を、數多く死に處し申候。

敵將カスルヘーヴンとフェラル中將とが、キルケニー附近及びカアロー、レーリン橋邊に占すると聞き、我等は進んで其方面に向ひ、處々を陷れて次第に進軍致候、ダブリン方面より來りて我等に加はる筈のヒューソン大佐の一隊は、レーリン迄來りしとの報知ありし故、余は大佐に同地の攻略を命じ、大佐は其地の堅壘を陷れ、又バロー河上の橋梁を手に入れ申候、かくてマンスター州とリンスター州との連絡成り申候、かくてヒューソン大佐と我等とはゴウランにて相會したるが、此町には堅固の壘ありて大佐ハモンドと云ふもの其守將たり、一度は余の勸降を拒みたるも、我軍の鋒先に驚きて遂に降伏開城致候。

茲に於て我等はキルケニーに向ふことに決し、三月廿二日市に近づき、其夜直ちに守將に勸降狀を送り申候〔譯者曰、此時の戰況及び交渉の模樣は前述せし故茲に譯さず〕。……遁がの敵も遂に降伏の意を表し候故、別紙の如き開城條件の下に市と城を我手に收め申候。——城は防備極て堅固にして且廣く、もし敵にして降伏せざりしならば、市を占領せし上、更に城に向つて新たに攻擊を開始せずばならず、而して此攻擊は多大の損害を我軍に與へしことゝ想はれ申候、されば別紙條件にて平和の中に此地を取りた

るは、特別なる天恩と感謝致し居候。

かゝる間にカントエル城砦も、我等に開城を申し込み來りし故、其提出せし條件を承認して受取申候、又アボット大佐はエニンスナグを手に入れ申候、高級副官サドラーはチッペレーリ郡及びキルケニー郡に活動して數砦を陷れ申候。——我等は本營をキルケニー市より遙か北方に進めて敵に迫り申候、此處にて神の恩惠の下に尙勝利を得んことを期待致候。

我軍の辛苦困難も一通りならず、もし軍費來らずば此征討を續くること出來難く候、もし軍費來らば此戰役も間もなく決了致すべく、從て英國が軍備負擔をするも長きことには無之と存候、願くは此點に於て至急の處置に出でられ度候。

最後に申上候、占領地增すに從ひ兵員の益々多きを要する次第に有之候處、貴政府五千の應募兵の中、未だ二千のみしか來らざる仕置にて候。——さて公務について上述の如く申上げし後、自己一身の事に關して明瞭正直に申上度きこと有之候。

貴殿等が小生の歸英を望む由の私報には度々接したれども、貴殿より公文の召喚狀來らざる中に、此地を去るは、少しく輕躁なりと存じ居候處、三月廿二日に貴下の書翰手に落ち申候、一月二十二日附の手紙が三月廿二日に着きたるわけにて、之は氣候の險惡と出船の都合とに原因致せしわけにて候。

御芳墨に依れば、召喚の理由は「冬營中にて戰爭も出來ざる故」とのことにて候が、既に余等は一月廿九日以來活動し居る故、如何に致して宜きや迷ひ居候、尙二月廿六日御發送の貴書には、召喚云々について一語無之候故、小生は茲に謹で貴殿等の眞意を折返し御尋ね致候、如何なる御命令にも迅速に服從致すべく候へど

も、神の與へ給ひし仕事に從ふことが小生の第一希望にて候、以上。

一六五〇年四月二日、カリックにて

オリヴー・クロムエル

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿

書翰第百三十一

茲に右と同日に子息リチャードに宛てたる手紙と、其岳父メーヤーに送つた手紙がある、此二でアイルランドよりのクロムエルの書翰は終る。

親しき兄弟よ、

多忙につき此方(こちら)の模樣を通信致さゞりしが、小弟は度々議會へは公報を送りたれば、多分世評にて此地の戰況を御知悉のことゝ存候。

曾一事申上度き事有之、主我等と共にありて我等の手を以て其榮光を顯し居り候、我等は弱兵の集合なれば此事は疑なき事實にて候、まことに我等の仕事は、我等の智力、勇氣、力量の生みたるものにあらず、唯先ち給ふ主の御足の跡に從ふのみにて候。

我等はキルケニー市を取り、又多くの重要地を陷れ申候、我等此事について何と云はんか、神我等と共にあらば誰か我等に抗し得ん、誰か神と戰ひて勝たんや、誰か神意に抗し得んや、主は愛の中に我等を護る。

御加禱を乞ふ、小生は貴家のために時々祈り居候、神我娘〔リチャード・クロムエルの嫁〕を惠み給はんことを祈る、我子リチャードについては萬事御忠言の程願上候、御家族皆々樣に宜しく御鳳聲被下度候、以上。

一六五〇年四月二日、カリックにて

オリヴー・クロムエル

ハムプ州ハースレーにある

我愛兄リチャード・メーヤー様

書翰第百三十二

ディック・クロムエルよ、〔ディックはリチャードの略呼〕

御身の手紙を嬉しく讀み申候、私は凡て心の僞らざるまゝの表白を喜び申候。

御身の今の境遇にあるは主の恩惠によるなれば、充分之に感謝して萬事に神の榮光を顯はすやう務められ度候、絶えず神を求むる事に全力を傾注し、他の事を第二、第三とせよ、キリストに於て神を知らんと努めよ、キリストこそ總體の中心、永久の生命にて候、眞智は文學的ならず、又思辨的ならず、內的にして、「世にある所の慾の敗壞を免かれ神の性質を有たし」（彼得後書一章四節）むるもの、パウロの云ひしが如き知識にて候。

然のみならず、我れ我主キリストイエスを識るを以て最も勝れることゝするが故に、凡てのものを損となす、我れ彼のために既に此等の凡てのものを損せしかど之を糞土の如く思へり、これキリストを獲、且つ信仰に基きて神より出づる義、即ち律法に因れる己が義にあらずキリストを信ずるに因れる所の義を有ちて、キリストの中に居り、又彼と其復生の力を知り、其死の有樣に循ひて彼の苦みに與り、とにもかくにも死にたる者の甦ることを得んがためなり（腓立比書第三章の一部）。

かゝる知識の我等の中に如何に乏しきぞや、余は御身のために祈らん。

妻を愛せよとは不用の忠告ならん、如何に妻を愛すべきかは主御身に敎へ給ひしならん、結婚は洗禮聖餐の式にはあらねど、清き床と愛のある所、此夫妻の結合は敎會とキリストの結合に似居り候、御身眞に妻を愛し得ば、此愛は敎會と其中の靈魂とに對するキリストの愛にて候、御身の妻に宜しく御傳へ被下度、私が彼女を深く愛する由申し聞け被下度候、メーヤー一家の人々に宜しく願上候。——ディックよ、主の恩惠充ち足らんことを祈る。

一六五〇年四月二日、カリックにて　　オリヴー・クロムエル

ハムブ州ハースレーにある

愛子リチャード・クロムエル殿

クロムエルは歸英する前に、二千のアルスター州兵が此處を最後と死守せるクロンメル城を攻擊して、大激戰の後遂に此城を英國の所有とした、五月九日のことで、敵味方とも死傷多く英軍はアイルランドにて初てかゝる强猛な敵に會つたと叫んだ、イングランドに於てもアイルランドに於ても、これ程勇猛なる攻擊とこれ程强梗なる防禦は曾てなかつたと云ふことである。

守將はヒュー・オッネルと云つて評判の勇將であるが、誤れる主義に立つたから克てぬのである、勇猛の戰鬪も功を奏せぬのである、オッネルは他所へ行つて其戰鬪の天才を發揮するが宜からう、玆に居ては實も實の役をなさぬ。クロムエルは、降參したアイルランド士官に外國行を許したので、佛蘭西や西班牙などへ行つて其地で其處の戰に加はつたものが多かつた、お蔭で彼等の本國（アイルランド）は平穩となつた。

クロムエルはヲーターフォードをも降さうと欲つたが、議會より

新に召喚狀來り、又スコットランドの雲行が大に險惡となつた故、アイヤトンを自分の代理に任じて、五月下旬舟に乘り、英國に向つて帆を揚げた、彼は九ケ月程愛爾蘭に居て立派に仕事を爲し上げた。

クロムエルはブリストルで大歡迎を受けし後、倫敦に向て急ぎしが、五月三十一日（金曜日）首府は上を下へと大騷ぎして彼を迎へた、實に花々しき大歡迎であつた、——賀儀、祝賀、祝砲、萬歲の聲は入れ亂れた、——一時は英雄崇拜、されど最上のそれではない、此時或人が訴(つら)つて、「閣下の凱旋を看んための夥しき群衆よ」と曰ふたのに對して、クロムエルは靜かに答へたさうである、「然り、されど余もし絞臺に上らんか、尙多數の人集らん」と。

* * *

クロムエルの愛爾蘭出征はまア上述(こんなもの)であつた、愛爾蘭人は未だに之を「クロムエルの禍」と呼んで居る、後事はアイヤトンが引受けたのだが、アイヤトンは熱病のために翌年死し、堅實なるラドローが其後を襲ふた、其後アイルランドの事には、共和政府議會と其掛りの文官が當ることになつた、之は當然のことであるが、然しアイルランド問題については、クロムエルが最上の權限を握つて居た。

「英議會はアイルランド人を剿滅する計畫であつたが、旨くゆかぬので、全部をコンノート州の沼地へ押し込めてしまつた」などゝ云ふ傳說があるが、之は例のクラレンドンなどから出たもので、根も葉もない訛傳である、後、清教徒衰へて再び王黨の世となつて後、彼はもう安心だと考へて、風說に基づきてかゝる事を書き遺したのであらう、彼の筆は百五十年間も權威(オソリテー)を持て居て、こんな訛傳が澤山傳つたわけである。

共和政府のアイルランドに對する處置は、ちやんと立派な文書に遺つて居て、クラレンドン等の誤謬を證して居る、第一、農工商等

の普通人は凡て其儘業務に安んじて尋問、刑罰を免かれた、第二、首領連、叛いた郷士、法王黨貴族等は各人罪に應ずる罰を受けた、第三、一六四一年の英人虐殺に加擔したものや、英國に裏切した連中は決して赦されず、死罪、追放、財産沒收に處せられた、勿論最初に審問して證據が擧つてからのことである、第四、或期間は英に背いたが英人虐殺には關係しなかつた者は、所有地を沒收されたが、コンノート州に價格三分の一の土地が給與された、第五、明かに法王黨にして英議會に好意を表せざりし人々は、所有地三分の一を沒收せられて、其儘其地に住むことになつた。

かくして、アイルランド人民は英政府の下に安んじて業に從ふことゝなり、國は再び舊の秩序に歸り、平和の風は凉しく野に山に吹いた、否新しい治政は舊いそれに勝つて居た、人民は耕し、堀り、鎚打ちて給料の拂はれざることなく、彼等が一國を成せし以來曾てなかりし程に眞理は彼等に語られ又彼等に對して行はれた、クランドンさへも、此時アイルランドは未曾有の繁榮に達したと云ふて居る、寔に信じ得べきことである、虛僞を行ひ虛僞を語るを止めて、眞理を行ひ眞理を語りなば、誰か憐れなるアイルランドの繁榮するを妨げ得ん。

この儘に續いたならば、アイルランドは益々發達して新敎的活躍に進み入つたであらうものを、新敎の敎會も出來て眞實、敬虔、公平、秩序の眞福音は次第に擴がらんとしたのである故、かの心靈界の抑壓物は衰へ去つたであらうものを、惜むべし王政復古起りて此國に於ける淸敎徒の仕事は根柢から切り倒されてしまつた、そしてアイルランドは今看るやうに進み來つたのである、あゝ「クロムエルの禍」と彼等が呪つて居るその物こそ、却て彼等を救ふに足る天來の眞福音ではなかつたらうか。

第六編

蘇格蘭出征

一六五〇年—一六五一年

（一）蘇格蘭出征

蘇格蘭人（スコットランド）と云へば初め「清教徒の王政反抗」の急先鋒にして、イングランドの清教徒と結びて壓制政治の破壞に努めたもので、其目的たるや聖書の神法の地上に於ける實現にあつたのである、彼等は今も尙ほ此目的を確保して居るが、それの實現方法について大分誤謬に陷るやうになつた、蓋しこれ、斯る大事業には是非無くてはならぬ英雄的指導者を、彼等は缺いて居たからである、曾て彼等の爲した「誓約（カベナント）」は、今は死せる儀文として彼等を重く壓し固く束縛した、彼等も亦「街學者」であつて「詩人」ではなかつた、彼等は天に星なき茫々たる大海に入りて航行の道を失つた。

蘇人の清教的企畫に於ける過誤、不幸は數多かつたが、彼等の中にその事に耐ふるだけの偉人のなかつたことが最大の不幸である、

文字や形式の囚ふる處とならずして、深く其精神に穿ち入りて天の靈氣に觸るゝ底の人物がなかつた、もしオリヴー・クロムエルにして蘇人ならんか、英雄國民に英雄王を與へしもの、必ずや其面目を一新したであらう、然り、クロムエルにして蘇國の人ならんか、全世界は清敎化したであらう、全世界を聖書的に改造せんと長く努力したであらう！　深き直視力と高貴なる大膽とに依て動くクロムエルの代りに、アーガイルだのラウドンだの云ふ衒學者階級の人が澤山居た、蘇王國委員會も僧職委員會も形式に囚はれて居た、神興（インスピレーション）なしの神政――これは極て望のない事だ、人民は一生懸命になつて居る、そして何處へ？　何處へ？　と尋ねて居る、指導者連は靑くなつたり、まご〳〵したりして、甲は止れ！　と叫ぶ、乙は後へ！　と命ず、丙は前へ！　と云ふ、――大混亂！　大混雜！　そして鎭壓すべき偉人は居ない。

蘇國の「誓約（カヴナント）」の趣意は聖書の神法を大不列顛（ブリテン）國に實現すると云ふにある、然しスチュアト家を王に戴くと云ふ事も明記してある、一方に聖書の神聖なる大法を立て、他方にチャールズ一世なりチャールズ二世なりのスチュアト王を置く、――こんな方程式はとても解けるものでない、あはれなるは蘇國の爲政家なるよ、されどかゝる爲政家の外に指導者を有せざりし蘇國人民の、更に尙あはれなる哉、否、人民の方は後には良くなつたが、爲政者は一向駄目である彼等は蘇國を治めたことは（眞の意味に於て）ないのである、治めやうと力むべき己れの義務すらも知らなかつたのである。あゝ世に衒浮者ほど恐ろしいものはない、彼は己を安全な人間と定（き）めて居るが、最も恐ろしい結果が彼から生れる、人間の罪惡にも種々あるが、神の聲を聞かざるの罪――眞理は白日の中に明煌々たるに形式、傳說の外には耳を假さゞる罪――然り、これ實に最も恐るべき天罰を

招くの罪である。

それはさて措き、憐れなる蘇國の爲政者は、チャールズ二世をして「誓約」を採用せしめやうと血迷つた骨折をした、成程かうすれば紙の上の文字は助かるが、神聖なる事實そのものは失せて仕舞はふ、若きチャールズは彼等の要請と一身の境遇に迫られて、「誓約」を採用した、彼等は、チャールズ王を推し立てゝ神の政治を地上に行はうと云ふ無理な計畫のために誤られて、無理々々にチャールズ王に誓約を强ひたのである、恐ろしき罪よ、彼等は「害惡黨」を排斥しながら、其首領を解りきつた糊塗的理由の下に奉戴する。

かくて、スチュアト家に生れたと云ふ事の外には何等誇る所なき、あまり感服も出來ない一青年は、「誓約を採れる王」として神政施行の舞臺に出でんとする、地上最も破格の事件と云ふべきである。

されば蘇國と英國共和政府の間に風雲の急を告げ來つたのは、自らなる成行である、共和政府はクロムエルをアイルランドより召喚し、彼のために軍を備へた、蘇國も亦兵を整へた、先方から攻めて來るか此力から攻めてゆくかと云ふ段になつた、アイルランドの紛糾を拓きしクロムエルは、茲にまたスコットランドの紛糾に關はらねばならぬ、クロムエルはフェヤフハクスの總指揮官たらんことを一心に說き勸めたが、フェヤフハクスの固く辭して受けぬため、彼は總指揮官に任ぜられて行くことになつた。

ラッドローの記事に依るに、此頃或日クロムエルがラッドローに會見を申込み、參議院に會せし時、別室に誘ひて、二人が密談をしたことがある、蓋しクロムエルは、ラッドローを以て愛爾蘭のアイヤトンの副將たるに好適の人物なりと認めて、其就任を勸誘したのであつた、其時種々と話した中にも、今地上に行はれ居る神の大攝理について述べ、又詩篇第百十篇について小一時間も語つたさうだ。

最後の一事はラッドローをして大に奇異の感を起さしめたと云ふが、ラッドローならぬ近世の讀者は、此事にクロムエルの特色を見るであらう、これから蘇國遠征に出やうとするに當つて、我等も亦此ダヰデの詩を讀まうではないか、されば英國最大の人が、希伯來の詩篇を通して、預言者的熱誠を以て此神の世界を看たことを想像し得るであらう、實に久遠より迸り出でし沈默の發聲が此詩である。

エホバ我主に宣ふ、我汝の仇を汝の承足にする迄は、
わが右に座すべし。
エホバは汝の力の杖をシオンよりつき出さしめ給はん、
汝はもろ〳〵の民の中に王となるべし。
汝の勢の日に、汝の民は聖なる美しき衣をつけ、
心よりよろこびて己を献げん、
汝は朝の胎より出づる
壯きもの丶露をもてり。
エホバ誓を立て丶聖意を更へさせ給ふことなし、
汝はメルキセデクの樣にひとしく、
とこしへに祭司たり。
主は汝の右にありて
其怒の日に王たちをうち給へり。
主は諸々の國の中にて審判を行ひ給はん、
此處にも彼處にも屍をみたしめ、
寛濶なる地を統ぶる首領をうち給へり。
彼れ道のほとりの川より汲てのみ
かくて首をあげん。

此の考を以てオリヴー・クロムエルは戰に往つた、ノヴリスの所謂「神に醉へる人」である、近世の歐羅巴歴史に於て、或は古の亞細

亞歴史に於て、此世の俗事を爲すに之れ程の神的感興を以てせる者他にありや？　久遠の光輝に沐浴して此朦朧世界を歩む、彼こそは世に稀れなる人物である、彼は强烈なる力を以て永遠より出でしもの、此世に彼に抗し得るものなし、事や偉大なり——悲壯なり、我等をして默さしむるの事なり。我勇敢なる人よ、君の古き高潔き預言は神聖なり、希伯來のダヂデより古し、人類の原始の如く古し、——而して君が想へるよりも濶き方法にて、實現せられん！。

(二)　書翰第百卅三—第百卅八

書翰第百卅三

〔譯者曰、之は議長レンサルに宛てし手紙で、或人のために計る所あつたもの、彼の愛心を表す好材料である、譯載を略す〕。

書翰第百卅四

一六五〇年六月廿六日（水曜日）、クロムエルを英軍の總指揮官とするの議は議會を通過した、有ゆる人々は彼に祝賀の意を表した、彼は急ぎ準備を整へた、三日の後彼は軍を率ゐて北方に向つた、クロムエル來るとの報は甚だしく蘇人を驚かした。

ラムバートは少將たり、從弟ホヵレーは兵站總監たり、大佐の中にはオヴァートンあり、ブライドあり、ヂョージ・モンクあり（此人默々として人の言を傾聽するのみ、されど實行の正確尺寸も誤らず）、ヨーク州の大尉ホッグソンあり、軍の北進するに從ひて右より左より馳せ加るもの多く、英蘇の國境トヰード河を渡らんとするや、兵數一萬六千に達す、今迄フェヤフハクスの秘書役たりしジョン・ラッシワスは此役クロムエルの秘書役として北行した。

ドロシー・クロムエル（リチャード・クロムエルの妻）は赤兒を生むだらしい、然し此赤兒は間もなく死んだやうである、クロムエルはノオサムバーランド州に入りて後、此手紙を媳の家へ出した。

親しき兄弟よ、

倫敦にて事務多端、遂に御無沙汰致候、貴兄及び御家族に對する小生の愛情に變りなきは、小生の心情之を證し候、小生は貴兄等のために屢々祈り申候。

赤兒の樣子聞き度きものにて候、父（リチャード）と母（ドロシー）の小生に無音なるは、甚だ宜しからず候、リチャードは怠惰者にて候へども、ドル〔ドロシー〕はも少し良い人間の筈なるが、多分リチャードに損はれたるにて候はんか、此由彼女に御傳へ被下度候、小生にして彼等夫妻の如き閑暇を有しなば、時々御文通申し上ぐべく候、我娘〔ドロシー〕妊娠中ならば兎に角、保育中にある事とて其無音宥し難く候、主彼等を惠み給はんことを祈る、兄が我息に忠言を與へ給へはん事を乞ふ、慥かに彼は之を要し候、彼は危險多き年齢にあり、而して此世は空しき世なり、おゝ早くキリストの許に行き度きものかな——此世に求むべきものなし、此世の高位大業——求むべき値なし、小生は主に逢はんとの希望の外には慰藉無之候、今回の事の如き夢々小生の好んで企つる處には候はず、唯主に招ばれて事に當るのみにて候、されば、主其憐れなる僕を用ひて其意を遂げ給ふとの確信は有之候、此點に於ては何卒御加禱被下度、皆々樣に宜しく御鶴聲被下度候、以上。

一六五〇年七月十七日、アニックにて

オリヴー・クロムエル

ハースレーの家にある

愛する兄弟リチャード・メーヤー樣

七月廿二日全軍バー井クを通過し、國境を越えて、モーヂントンに二日滯陣した、蘇人は恐れて其前に逃げた、僧侶は英軍を惡魔の使者なりと人民に敎へた、「異端者及び褻瀆者の軍」とは蘇國に於ける英軍の別名であつた。

英軍は「蘇國の聖徒に對しての宣言」及び「蘇國一般人民に對する公示」を發表して、人民の英人を奪掠者、虐殺者となすの誤謬を正し、聖徒に告ぐるに、チャールズ・スチュアトと其與黨の側には眞理の存せざること、英人は「誓約」の實を求むる者なると、英軍は褻瀆者の集合にあらず、神の忠僕に對しては一毫も敵意を抱かざるものなることを以てした、——眞摯切實なる文書にしてオリヴーの意志は隨處に發露し居れど、彼の筆にあらざる故之を掲げない。

蘇人は議會の嚴命によりて、家財をひつさげてエヂンバラ方面に走つたが、家妻は多く家に殘つて居た、そして其中には英軍にパンなどを給したものもある。

ホッグソンの語る處に依れば、モオヂントンに宿れる月曜の夜、全軍既に國境を越えしことゝて、クロムエルは大訓示を士官及び兵卒に與へた、其大意は、大事前にあれば基督信者として又軍人として益〻勤勉愼重なれ、我等今日迄恩惠に浴せし事多ければ、忠實善良に歩みて、更に同一の恩惠を望むべきにあらずやと云ふにあつた、全軍は喝采を以て此訓示に酬いた。

一週の後、クロムエルは議長ブラッドショウに次の如く報じた。

書翰第百卅五

〔譯者曰、此手紙は七月三十日マッセルバラより參議院議長ブラッドショウに宛て、同地附近の小競合の模樣を報じたものであるが、あまり重要でないと思ふ故、之を譯出せぬ、——此書翰に依て察す

るに、敵將レスレーは成るべく戰鬪を避けて、英軍の糧道を絶ち英軍の飢餓と疾病に困憊して戰はざるに退くのを待つと云ふ巧妙なる兵略を執つたのである〕。

慎重なる蘇將デーヰッド・レスレーはレース灣の岸よりカルトンの丘までに陣列を敷きて、之より一歩も進まず、全エヂンバラ、否全スコットランドは彼に豐かなる供給をなすべく後に控へて居る、如何に誘ふも彼は軍を進めぬ、蘇國内諸派の動搖は甚だしきも、レスレーのみは其砲を抱へて此處に固執す、彼の軍はあまり立派な軍とは云へぬ、將校士官には兵事を解せぬ者が多かつた、されぱレスレーたる者益〻守勢に出でざるを得ぬ、彼はエヂンバラの近郊なる一村に宿し、甚だ用心深く構へ込んで居る、クロムエルは之を誘ひ出し、て戰はうとする、此二將の此一ヶ月は大凡こんな風であつた。

書翰第百卅六

クロムエルの前述の宣言に對して蘇國側より反駁あり、クロムエル復之に應じて駁論を公けにし、蘇國復之に答うると云ふ風で、互に論じ合つたものだが、書翰第百卅六はクロムエルより蘇國僧職總會に宛てたる、かゝる反駁書の一である。

卿等よ、

卿等の我軍の宣言に對する返答書拜見仕候、我僧職は夫れに答ふるの辭を草したれば、同封にて送り申候。

此度の事に於て卿等が神意に叶ふか我等が神意に從へるかは、神の慈愛によりて定ることにて候、されぱ我等は此結果を凡てを處理する全能者に任せ申候、但し我等は光明と慰安の日に增し加はるを知り、遠からずして神其大能を現はし給ひて、萬人之を認むることゝ確信致し居候。

卿等は我等を知らずして、我等の神の事について、我等を審く、而して卿等は頑なにして巧みなる語を以て、人民の中に偏見を懷かしめたり、人民は、良心の問題については一人々々が神に對して責を負ふべきなるを、あまりに卿等に盲從し過ぎたり、——これ彼等を破滅に導くにあらざるかと、我等は危ぶみ居候。

卿等は我等より蘇國人民に告げし公書を隱して人民に示さず（彼等之を見なば、我等の彼等に對する愛情をも知らん者を——殊に神を恐るゝ者は）、然れども我等は卿等より來る文書を自由に兵卒に示し候故、澤山御送り越され度候、余は之を恐れず候。

我等は人として各種の宣言公示をなすか、或は主のため主の民の爲に之をなすか？　寔に我等は卿等の數〔大軍の意か〕を恐れず、又己れにも信任を置かず候、我等は卿等の軍に對し得べし（神に祈る、我等を以て誇るものとなす勿れ）と信じ居り候、我等卿等に近よりし以來、神は聖顏を隱し給ひしこと無之候。

卿等の罪大なり、無辜の民の血を流すの責を受け給ふ勿れ（卿等は王及び誓約を掩飾として民を欺き、民の眼を暗くせり）、卿等は他を批難し自己を神言の上に立てりと云ふ、卿等の曰ふ處悉く神言に應せるか、願くは自らを欺き給ふ勿れ、敎訓に敎訓を加へ、度に度を加ふるも、主の語は或人には審判の語となりて後に倒れ、損はれ、罟に掛りて捕へらるべく候（以賽亞書二十八章十三節）、使徒行傳第二章にあるが如く、世が以て狂氣と認る靈的充實もあらん、又靈的酩酊と云はるゝ肉的信賴（誤解せる敎の上に立てる）もあり、死と立てし契約あり、陰府と結びし契りあり、（以賽亞書二八の一五）、我等卿等の契約を以て此類となすにはあらず、されど此事に於て惡しき肉の人と同盟するも、尙且つ神の契約にして靈的なりと云ひ得べきや、願くは三思せられ度候。

以賽亞書第二十八章を五節より十五節まで讀みて、命を與ふるものは聖靈なることを知られ度候。

主卿等と我等に聖意を爲すの明を與へ給はんことを祈る、願くは神恩卿等の上にあれ、以上。

一六五〇年八月三日、マッセルバラにて　オリヴー・クロムエル

蘇國僧職總會御中

（もし總會開會中ならぬ時は僧職委員會へ）

以賽亞書の第二十八章を蘇國僧職總會が讀んで、深く心に留めたかどうかは解らぬ、然し彼等は之を讀むべきであつた、我等も亦讀むべきである。

その日萬軍のヱホバその民の殘れる者の爲に榮の冠となり、美しき冠となり給はん、審判の席に坐する者には審判の靈を與へ、軍を門より遂ひ返す者には力を與へ給ふべし。

然れども彼等も酒に由りてよろめき濃き酒に由りてよろぼひたり、祭司と預言者とは濃き酒に由りてよろめき、酒に呑まれ、濃き酒に由りてよろぼひ、而して默示をみる時にもよろめき審判を行ふ時にも躓けり、凡て膳には吐きたるものと穢れと充ちて潔き處なし。

彼は誰に敎へて知識を與へんとするか、誰に示して音信を曉らせんとするか、乳を斷ち懷を離れたる者にするならんか、そは誡命にいましめを加へ誡命にいましめを加へ、度にのりを加へ度にのりを加へ、此にも少しく彼にも少しく敎ふ、この故に神あだし唇と異なる舌をもて此民に語り給はん、曩に彼等に言ひ給ひけるは此は安息なり疲困者に休みを與へよ、こは安慰なりと、されど彼

等は聞くことをせざりき、かゝるが故にエホバの言彼等に降りて誡命に誡命を加へ誡命に誡命を加へ、度に度を加へ度に度を加へ、此にも少しく彼にも少しく教へん、之に因りて彼等進みて仆れ損はれ罟にかゝりて捕へられん、汝等このエルサレムにある民を治る處の輕慢者よ、エホバの言を聽け。

然り之を聞け、心の耳を以て聽け、汝僧職委員會よ、到る處の爲政者よ、これ汝等に肝要ならん、もし神此言をなし永久の眞理此言をなせしならんには、之を實行すべきではないか？

デーヰッド・レスレーは依然として戰陣に止まつて居る、そして空は雨降り勝ちにして、兵糧は缺乏する、前の手紙は金曜に認めたのだが、次の月曜（八月六日）には、糧食補充のため英軍はマッセルバラより背進して、ダンバーに退くことゝなつた、蘇國委員會は歎呼の聲を放つた、レスレー將軍は猶其陣地に止る。

ダンバーに於ては蘇民の飢饉甚だしく、英軍の馬の食べる豆の落ち散れるを拾つたり、兵士の殘食を食べたりした、彼等はあまりに貴族富者の奴隷であつたのである、憐れなる民よ、クロムエルは豆や小麥を多量に彼等の間に頒つた。十二日全軍またマッセルバラに歸り（其行動の機敏さよ）、ペントランド丘に陣して、敵の糧道を絶ちてレスレーを挑んだ。

書翰第百卅七

〔譯者曰、之は八月十四日ペントランド丘上の陣營より敵將レスレーに與へし書翰にて、書翰第百卅六と同一趣意のもの故譯載せぬ〕。

蘇國側の方にも眞面目な信者が居るので、英軍の數回の宣言に因て次第にクロムエル等の眞意を解し始め、茲に平和の解決を見るやうな曙光が現れ、現に敵の雄將ギルバート・カー大佐の如きは、數回

英軍の代表者と會見する所あつた、——然し事情ありて平和の望も失せた。

それかと云つて、蘇兵は戰陣に固執して出でゝ戰ふことをせぬ、英軍は示威的にエヂンバラ附近を廻り、ペントランド丘に陣し、又マッセルバラに退いて補給を得、再びペントランド丘に歸り、眼下の絶景に戰陣の憂を忘る、紺碧の海は渺茫として際涯なく、金色の麥畑は微風に涼し、ベンロモンド山よりバスの岩に至る間ハイランドの山々は朦朧として雲霧の中にあり、されど戰は少しもない、秋分は十日以内に來らんとし氣候は甚だ惡く、兵は續々として病に臥す、風と潮の工合によつては、ビスケットすらもダンバー以北にて陸揚げすることは出來ぬ有樣である。

書翰第百卅八

貴下よ、

前便以來、敵はエヂンバラの西側なる陣地に固着して會戰を好まざれば、我等は再び敵に近づきて戰を挑まんと欲して前進致候。即ち二十七日（火曜日）我等はエヂンバラの西側をスターリングに向つて進み候處、敵之を遮らんとして急速力を以て進み來り、茲に兩軍の先鋒は衝突して小競合を始め申候、因て我全軍は敵の全軍に當りたるも、其地は沼など多くして兩軍近接する能はざる有樣にて、困り入り候。

されば我より數百發の砲丸を放ち、彼亦之に應じたるのみにて終り申候、我死傷は卒二十を出でず、敵は八十人を失ひ、死者の中には將校もありしとか、かゝる始末にて敵を擊退する能はず、且糧食も失くなりたる故、水曜の午前十時頃退却を開始致候、敵は我が退却を認るや急遽退却致候、多分我軍が彼等とエヂンバラの

間を扼すること丶誤想した事なるべく候。

此夜我等はエヂンバラより一哩、敵陣より一哩の邊に夜營致候、恐しき暴風(あらし)の一夜にて候ひき、敵は此夜レース灣とエヂンバラの間に出で丶我等の糧道を斷たんとせしも、神之を妨げ給ひければ、翌朝我等は無事海岸に到りて船より新たに糧食の供給を得申候、此際敵は丘上にありて我等を下瞰し居たるも、何等戰意を表せずに終り申候。

目下の狀況あら〳〵右の如くに候、以上。

一六五〇年八月三十日、マッセルバラにて

オリヴー・クロムエル

白館(ホワイトホオル)の參議院にて　何某殿

クロムエルが此手紙をマッセルバラにて認めし後、直ちに軍議開かれて、重大の決議が定まつた、病は流行し、天候は險惡にして糧食の供給は不確實、且敵は挑戰に應せざれば、此地に止るも害あつて益なし、ダンバーには港あり、要害の地なり、且蘇國に於ける唯一の味方たる英船も碇泊し居れば、いざダンバーに退かんと。三十一日の夕、クロムエルは陣營を燒きてダンバー指して行く、敵將レスレー之を逐うて進む、クロムエルは土曜日の夜ハッヂントンを通り、翌日曜日には終日行軍してダンバーに到る、而してレスレーはクロムエル軍の後陣を壓しつ丶ダンバーに迫る。

(三)　書翰第百卅九—第百四拾六

ダンバーの戰

ダンバーの小邑は、目の達(とど)く限りの海岸に突出せる許多の巖岬の

一の上に、高く天風にさらされて立つ、海は美に、地味は佳し、暗澹たる硬巖の岸はヂャーマン海の怒濤を遮る、聖(セーント)アブの岬は東方の地平線を劃し、西方には深き入江ありてベルヘーヴンの漁村立つ、陰欝なるバス其他巖島は數多海上に散在する、ベルヘーヴンの入江より聖(セーント)アブ岬に至る間に、ダンバーは其附近一帶の地と共に半島を形造る、此半島の基底に添ひて、クロムエルの軍は一六五〇年九月二日（月曜日）、其陣營とダンバー町とを後に据ゑて、窘窮の有樣に於て陣列を布いた、今や彼はスコットランドに於て此地より外に有する處なく、彼の船は沖に兵糧を積みて待てども、見ゆる限りには地上に一の援助なし。

ダンバーより小一哩内地に寄りて一帶の丘陵あり、ラマームアの高地と稱し、沼多く荒草離々として山羊の外に住む者もない、此高地の一端に在る高き丘上に、老レスレーは兵を布いた、土地の人は此丘をダン、ドゥーン、ダウンなどゝ呼んだ、勝ち誇れる蘇軍は兵數二萬を超え、蘇王國委員は多くの大官と共に之に從ひ、まことやスコットランドの精華を茲に集めしものであつた、日曜の夜以來彼レスレーは此丘上に陣し、虎爪を擴げてクロムエルのダンバー半島を一攫(ひとつかみ)にせんとするが如き位を取りて、オリヴーの動靜を窺うて居る、左方コックバーンズ通路(パス)は敵にふさがれてしまつた、オリヴーは後は海なり、前にはレスレーあり、ドゥーンの丘あり、ラマームアの高地あり、レスレーの軍は二萬三千にして（或は二萬七千と云ふ）追擊の元氣に充ち、オリヴーの兵は其半數にして背進軍の意氣や沮喪し易し、彼の前途や如何？

書翰第百卅九

ニューカスルの守將ハスルリッヂに宛てクロムエルは此手紙を書

いた、彼は難境に處して何等つぶやく所なく、眞面目に敏活に其時其時の事務を處理したのである、或人は彼について言ふた「クロムエルは强き人である、戰況味方に利あらずして他人皆絶望せるの時、希望は火の柱の如く彼の中に輝く」と、實に彼こそ人類の眞王である、彼今や難戰に入らんとす。

親愛なる君よ、

我等は今難戰に入らんと致し居候、敵はコッバーズ通路を閉塞致し、神業ならでは之を通る能はず候、我等此處に在りて病疫猖獗、日に數を減じ居り候。

貴君の軍が直ちに我等を援け得る程に準備整ひ居らざるは小生の察する處に候、さりながら、我等は如何ならうとも、貴君に於ては出來るだけ兵備を整へらるゝこそ宜しかるべく候、事は凡ての良民に關係致候、もし貴軍にしてコッバーズ通路の背面に襲ひ來るを得るとせば、我等は海より糧食の供給を得べく候。されども最上の道は獨り賢き神知り給ふ、萬事は善に向て動く、我等の現境は此の如くなれども、我等の心には慰藉あり、——主讃むべきかな、げにや我等は主に大なる希望を懷く、其恩惠は我等の充分に實驗せし處に候、以上。

一六五〇年九月二日、ダンバーに於て　オリヴー・クロムエル

ニューカスル(又は他の處)にあるサーアーサー・ハスルリッヂ殿

(至急、至急)

ダンバー半島の基底は、ペルヘーヴン灣の岸より起りてブロックスマウス邸に至て海に入る、此間約一哩半、ブロックスマウス邸は

ロックスバーグ伯の邸宅であつて、其名の示す通りブロック川の河口に立つ、此處はクロムエル軍の占め居る最左端の地點である、此小川はラマームアに源を發し、レスレーの陣せるドゥーン丘の裾を廻りて、此處にて海に入る、此小川は深い、草深き谿を通るが、此谿と云ふのは深さ四十呎、幅は其數倍もあつて、數千年數萬年の間に、次第々々に川のために堀り下げられて出來たものである、オリヴーの軍は此川の左岸に沿うて——川とダンバー町との間に——陣を布いたのである、クロムエルは部下の士官と共に月曜一日を此配陣に費した。同じ日の黎明、レスレーは此小川の右岸を占領すべく先づ騎兵を丘上より降し、午後四時頃よりは次第に全軍丘を降りて、川と丘との間の狹地に陣を取る。即ち此月曜日（九月二日）には篠つく雨と吹き荒ぶ風の中に、ブロック川の兩岸に（敵は右岸に味方は左岸に）陣列が布かれたのであつた、敵にせよ味方にせよ、攻擊を開始せんには先づ第一に此川と河谿を超えねばならぬと云ふ大不便に立つのである。

オリヴーの陣列の背後（陣列と町との間）には天幕小屋が澤山散在して居る、一個大隊に一つ宛の野營である、此野營のある地は凹凸の多い低地で、現今は秋風に金波の至らぬ隈もないが、當時は其一部のみが耕地で、殘部は荒草離々たる有樣であつた、此日驟雨を伴ふ風は烈しく吹き、幕屋は辛く立つて居た、此朝クロムエル軍の砲は、僅かに一軒しかない農家に運ばれた、外にも一つ小屋が河谿の底、河畔に立つて居るが、此邊は河谿が淺いので、川の「通路」となつて居るのである。

ブロック川にはも一つ「通路」がある、今の「ロンドン道」は此通路を過るのである、前に云つた「通路」よりは一哩も東に寄つて

河口のブロックスマウス邸に近い邊にある、此處は河谿の兩岸の傾斜が緩かで人馬の通れる程の坂路となつて居るのである、但し南岸即ちレスレー軍側の方にては稍々峻しく、高まりて高地となり、ドゥーン丘の起端をなして居る、此通路に於て、ダンバー會戰の血劇は起つたのである、げにや茲に天が下に爲されたる義勇軍の墓が記念碑なしに立つのである、寔に一英雄の足跡が茲にあるのである！

此日の夕暮、オリヴーはラムバートを携へてブロックスマウス邸の庭を散歩して居た、ふと見れば、レスレーは丘を降りて對岸の傾斜せる耕地に陣し、騎兵の左翼部隊の大部を右翼に牽きて、全線次第に右へ右へと動く、讀めたり、讀めたり！　彼はブロックスマウス邸と其傍の「通路」を占領せんとするのである、かく爲てしまへば何時でもクロムエル軍を衝くことが出來る、敵は思ふた、もうクロムエルは袋の中の鼠である、逃げることは出來ぬ、全軍の覆滅期して待つべしと。或傳説に依ると、之はレスレーが僧職委員會（軍に同行せる）に迫られて、心ならずも爲した攻擊法であつて、クロムエルは敵の此右進を看て「主我等を救ひ給へり」と叫んだとか、レスレーが此進擊を爲したのは、自ら死地に入つたやうなもので、其原因については種々の説があるが、要するにレスレーは何かに强ひられて此日終日全軍を丘より降して右に進めたのである、そしてクロムエルは此敵軍の運動の目的とする處を見拔いたのである。

ブロックスマウス邸に敵の此運動を看たるクロムエルはラムバートに曰ふ、「我等より進んで敵を打つは宜からずや、敵の右翼は開豁地に來りたれば何側よりも打つことを得、其本隊は丘と川との間の狹地にあれば、兵を動かす餘地なく右翼を援くる自由もなし、先づ右翼を前面と側面とより我全軍を擧げて打たば、逃場は無ければ其本隊の上に崩れかゝらん、然らば全軍の覆滅易々たらん」と、ラム

バートは熱心に曰うた「小官も此事を進言せんと思ひ居たり」と、偶〻此場に現はれしモンクも亦之に同意した、茲に軍略定まつて、攻撃開始は明朝拂曉と定まつた。

兵は此難戰を前に控へて皆武器を抱へて寢た、風吹き荒びし一夜よ、九月二日は今の暦に依れば九月十二日である、收穫月は霙を降らす雲の中に深く隱れて居た、祈れ、祈れ、死鬪近づけり、祈れ、而して火藥を濕らす勿れ！　覺悟せよ、丈夫の如く振舞へよ！――かくの如くにして彼等は此夜を送り、ダンバー半島とブロック川とをして永く我等の記念地たらしめた、我等英人は幕屋を持ちしも蘇兵は之を持たず、荒ぶる海は低く重く動きて硬岩の入江を撲ち、大血戰を豫表するが如し、外は海と暴風、我等の他は皆眠れり、――唯大能者の風の翼に乘れるを想ふ。

午前三時、蘇の歩兵は命に因て一中隊に二の火繩を殘して他を悉く消し、稻叢の隱に結び難き夢を結ぶ、醒めよ汝英兵、警めよ、祈れよ、而して火藥を濕らすな。午前四時命令來る、曰くホッグソンの聯隊を先頭として全軍ブロックスマウス邸に進み、ブロック川の「通路」を渡り、敵の右翼を擊破すべしと、其前我ホッグソン少佐は陣列を巡視して、一旗兵旗手の祈れるを認め、馬首を廻らして暫し之を傾聽して居たが、軈て共に祈禱を始めた、此下士は極めて熱心に祈りて少佐に百倍の勇氣を與へ、少佐は又此事實を士卒に語りて之を勵ましたと云ふ、まことや天は我等に救出の道を拓きたり！時しも月は黑雲に乘りて物凄く輝き、東方聖アブの岬には既に黎明の微光を見る。

攻撃の時は來た、けれどもラムバートの姿は見えぬ、彼は遙か右翼の陣列を整へて居たのであつた、オリヴーはラムバートの遲きに頻りに焦立つた、蘇兵の右翼も醒めて我等を打たんとするが如く、

喇叭は一度響いた、然るに攻撃を指揮すべきラムバートは未だ來ない、クロムエルは焦立つた、——見よラムバートは遂に現れた、勿ち聽く、喇叭の響は鋭く夜の沈默を破り、砲は全線に添うて鳴つた、

「萬軍のエホバよ！　萬軍のエホバよ」と、進め、我勇士よ、進め！

此右翼部隊攻撃は四十五分間の激戰猛鬪であつた、味方の砲銃火は對岸の敵の主力を見舞つた、——然し蘇軍右翼の騎兵隊は、槍騎を第一列に連ねて猛然として襲ひ來り、我等一度は少しく退いた、されども神は我等に力を賜ひ、我等は步騎もろとも敵に殺倒して之を蹂躙した、右翼の敗兵はコッバース通路に走つた者もあるが、大部は味方の本隊の步兵の上に崩れかゝつた、あはれなる步兵よ、既に對岸より銃砲火を浴びて、未だ火繩すら全部燃えつかざるに、今新たに味方の騎兵の崩壞し來れるがために、其馬蹄に蹂躙せられ終つた、其塲に死せし者實に三千を越えた、秘書ラッシワスは議長に報じて曰うた、「余は未だ步騎の攻撃のかく迄に成功せしを見ず」と、時に恰も旭日の第一光は海角の上に日耳曼海より出でた、詩篇作者は歌ふ、

ねがはくは神起き給へ、
その仇はことゝく散り、
神を惡むものは
聖前より逃げ去らんことを。〔六十八篇第一節〕

と、まことに其の如く蘇軍は全く攪亂されて、殘軍は右に走り左に逃れ、混亂してダンバーを指して逃げる者さへ少くなかつた、ハッカーは追撃軍を導きてハッヂントンまで逐ふた、其前英軍はクロムエルの命によりドゥーン丘の麓に止まりて、詩篇第百十七篇をバンガーの譜に合せて、心ゆく許り天空に向つて歌つた。

もろ〳〵の國よ

汝等ヱホバを讃めまつれ、
もろ〳〵の民よ
汝等ヱホバを稱へまつれ、
そは我等に賜ふ
そのあはれみは大なり、
ヱホバの眞實は永へに絶ゆることなし、
ヱホバを讃めまつれ。

歌ひ終つてまた追擊に移つた。

捕虜一萬、高官名士にして擒獲せられしもの多く、及の鏽となつたものも少くなかつた、僧職委員會の僧侶にして殺されしもの捕はれしものもあつた。

デーヰッド・レスレー大將は逃げる事にも强くて、九時にはエヂンバラに歸着した、老リーヴン〔敵の副將?〕はレスレー程には敏活でなく、やつと午後二時に着いた、悲慘の極みではないか、思ひ見よ、一六四四年一月、蘇人が英の民軍を援けて王黨を斃さんと、「滿目皚々たる白雪に膝を沒してダンバーを去」〔上卷一六七頁〕つた以來の變化を、場所は同じきに事はあまりに違ふではないか、當時彼等は「誓約」に依で起ち、今も亦誓約に依て起つたのであるが、彼等は誓約の文句に拘泥し、英人は其實に依つたゝめに、茲に二者の衝突を來し、遂に蘇人は其誓約と共に覆滅されたのである。——蘇人よ、今は學ぶ處あれ、卿等が誓約の文字は再び復活せざるべし、されど其精神、實質は決して死することはあらじ。

かくの如きが實にダンバーの戰爭であつた、世にも珍らしき壓倒的勝利であつた。

公　示

蘇兵にして、負傷のために退却する能はずして、其儘戰場に止るものありと聞く。

蘇國の人民に、戰場に入りて自國の負傷兵を擔ひて、適當の場所に運び去るも隨意なりと知らしめよ、英軍の將卒は此事を含み置くべし。

一六五〇年九月四日、ダンバーに於て發す

オリヴー・クロムエル

書翰第百四十

〔譯者曰、前半、月末よりダンバーの戰迄に至る戰報の部は上述と重複する故略す〕。

……されば此戰こそ神が英國と其民とに與へ給ひし最も大なる恩惠の一にて候、「神之れを爲し給へり」と云ふは至つて容易く候、されど、主の榮光を顯はし主の稱讃を受くるやうの改善進歩を施し、主の御恩惠の空しくならざらんことを努むるは貴兄等の責任にて候、貴兄等議員諸君が貴兄等の奴僕たる我等を認めずして唯神をのみ認めん事を願候、又神の民を認めんことを願候、貴兄等が自己を否認して、而も議員たるの權威を認め、之を用ひて、英國の平和を亂さんと謀る暴慢無禮の徒を（其如何なる口實を有するとも）懲らさんことを願候、被壓抑者を縱ち、憐れなる捕囚者の呻吟に耳を傾け、凡ての職業に伴ふ害惡を除かんと力められ度候、もし少數を富まさんために多數を貧者とするが如き職業あらば、これ共和政の本旨に背き申候、貴兄等の奴僕〔クロムエル等〕に戰鬪の力を賜はる神は、神の榮光のため共和國の榮譽のため、貴兄等にも亦施政改善の力を賜はるべく候、——然る上に於ては單に英國の幸福のみに止まらず、各國も亦之に倣ひて、遂に世界萬

民の利福と相成るべく候、貴兄等の精々此事に當り給はんこと、我等の懇願する處に有之候。

我等此國に來りし以來、專ら流血を避けて圓滿の解決を見んと欲し申候、これ蘇人も亦神を畏るゝ民なる故にて候、されば度々蘇國人民に我等の眞情を披瀝したれども、僧職等は我等の意志の人民に傳はるを妨げ申候、此度の戰に僧職等の中に死せし者もある由、これ主の大なる御手と存候、彼等は愚かなる牧者にして、此世の政治に干渉し、此世の政權と結びて所謂「キリストの王國」を建てんとの愚圖に出で、神國建設のための唯一眞正の力なる神の言、聖靈の劍〔眞の劍にあらず〕を蔑視する輩にて候、望むらくは彼等が福音の單純に歸りてイエスの宣傳のみを爲さんことを。此長信を宥されよ、以上。

一六五〇年九月十四日、ダンバーに於て

英國議會議長ヰルヤム・レンサル殿　オリヴ！クロムエル

書翰第百四十一

ダンバーの戰の前日にハスルリッヂに宛てゝ認めた手紙（書翰第百三十九）は、つい出ずに仕舞つて、此書翰第百四十一の中に封入して送られたのである。

貴君よ、

別紙〔書翰第百三十九〕に依りて會戰前に於ける我等の地位を御了解相成度、以て今回の勝利の如何に大なる天恩なるかを知られ度候。

今回の戰勝についての小生の感想は議會まで申出で候に付、貴君には唯戰勝の報告に止め申候、これ主が貴君の心を開きて恩惠的

思惟に入らしむることを信ずるが故にて候、尙ほ主我等の業を祝し給はゝ、エヂンバラ、レース、スターリング橋等に於て尙開戰の機會を與へらるゝことゝ愚察罷在候。

かゝる次第に候へば兵力の充實こそ願はしく、就いては何卒貴軍の至急御來援あらんことを願上候、先づ目下整ひ居るだけの兵をトムリンソンに與へて至急に來らしめ、殘餘を貴君が統率して來ることは最も機宜に適することゝ思はれ申候。

願くは機會を失はず時を失はざらんことを、敵にも相當の企畫あるべければ、現はれたる機會を採るは我等の利にて候、以上。

一六五〇年九月四日、ダンバーに於て　オリヴー・クロムエル

ニューカスル(又は他の處)にあるサー・アーサー・ハスルリッヂ樣

書翰第百四十二　(至急、至急)

〔譯者曰、之は九月四日に參議院議長に宛て、戰後の模樣を報じたものである、少將ラムバートに六個聯隊を附してエヂンバラに向はせたことや、捕虜の處分に苦しんで其半數を解き放つたことなどが記してある、譯出を略す〕。

公文書は右にて終つて、茲に家庭的の書翰がある。

書翰第百四十三

最愛の我妻よ、

余は長く書く時を有たず候、されど汝(おんみ)よりの來書に、屢々汝(おんみ)と子(こども)女とを忘れぬやうにとの注文あるは、甚だ其意を得ぬ儀にて候、

げに餘りに汝を愛せずば他面に於て餘り過つこともなきものを、汝は何ものよりも余に愛し——此語を以て滿足せられよ。

主絶大の恩惠を我等に賜はり候、余が薄信も之に因て支えられ候、余も近頃は老人となりて老衰の著しく迫るを感じ候へども、我が「内なる人」は著しく強められ申候、我朽つべき體は早く朽ちよ！我等が今回の成功についてはハリー・ゼーン又はキルバート・ピカリング之を詳報すべく候、一同に宜しく、以上。

一六五〇年九月四日、ダンバーにて　オリヴー・クロムエル

白館内にある

我愛妻エリザベス・クロムエルへ

書翰第百四十四

親しき兄弟よ、

主スコットランドに於て大恩惠を賜はりたれば、目下多忙なれども、此際貴兄に御知らせ致さゞる能はず候。

水曜日（火曜日と記すべきを誤記せり、且綴字に誤りあり、以て彼の繁忙を知る）我等は蘇軍と戰ひ申候、敵は二萬、味方は一萬一千にして病者多し、祈禱多時にして、約一時間戟を交へしが、敵兵三千を殺し一萬を擒獲し、兵器彈藥の鹵獲極て多く候、味方は死者三十人を出さず候、これ主の爲し給ひし事にして、我等の眼に異しとする處にて候、君よ、凡ての榮光を神に歸せよ、御家族一同をして然かせしめよ。

一六五〇年九月四日、ダンバーにて　オリヴー・クロムエル

ハースレーにある

愛する兄弟リチャード・メーヤー様

追伸、御令閨様始め御一同様に宜しく御傳へ被下度候、ドル〔ドロシー即ちリチャード・クロムエルの妻〕には彼女と彼女の兒を忘れずと御傳へ被下度候、彼女よりの手紙はあまり禮儀正しき書振にて物足らず、も少し卒直の手紙を望み申候、小生は彼女と彼女の良人との上に祝福を祈り候、彼等は閑暇ありながらあまり手紙を書かず、二人とも怠惰者にて甚だ宜しからず候。

書翰第百四十五

アイルランドにて同一主義のために戰へる女婿アイヤトン中將等に對して、クロムエルは忙中を割いて戰勝を報じ、慰藉奬勵する處あつた。

貴君よ、

貴君よりの御消息は餘りなけれど、貴君が小生を忘れざることを小生は知り居候、小生も亦君を忘れずと思ひ給へ、祈りの坐に於て小生は屢〻君を思ひ出し候、――主の御手君を援けてヲーターフォード、ダンカノン、カサーロー等を攻略せられし由、主の御名の讃むべき哉。

我等は世にも稀なる難戰を終り申候……〔譯者曰、此間に戰報あれど上述と重複する故略す〕。

……戰の前や、我等の位置は甚だ憐れにして敵の輕侮威嚇に會せしも、主大なる慰安を以て我等を支持し給ひ候。

多忙中ながらも、神の此大恩惠（神は之に因りて聖名の榮光を顯し、聖徒に元氣を賜ひ候）を貴君等に御知らせ申し候は、一には貴君等の之を知りて歡喜讃美に溢るべきを思ふがため、一には我等苦境に在りし時貴君等の成功を聞きて元氣を得しが故に、貴君

等も亦我等の成功に因て激勵を得べきを思ふがためにて候。

主貴君等と我等を惠みて殘生を御報謝の中に送り得んことを祈る、君と共にある我等の親しき友人各位に宜しく御傳へ被下度候、以上。

一六五〇年九月四日、ダンバーに於て

君の慈父にして眞友なる

オリヴー・クロムエル

愛爾蘭代理太守アイヤトン中將殿

此手紙にはブリヂェット・アイヤトン〔クロムエルの娘にしてアイヤトンの妻〕のことは少しも出ないが、彼女は戰塵の濛々たるを觀ずに、無事倫敦に、父と良人とに離れて暮して居るのである、――そして其勇敢なる良人には再び逢はぬであらう。〔譯者註、アイヤトンは後愛爾蘭に客死した〕。

書翰第百四十六

ダンバー會戰の翌日、クロムエルはホチートン卿に次の如く書き送つた、ホチートン卿等の當時の位置については、書翰第百十八に出た通りであるので、クロムエルは此大勝を知らせる氣になつたのだ。

我が親しき卿よ、

余は貴兄を愛す、主を愛せよ、推論に欺かれ給ふな！　聖（セーント）ジェームズ公園に於て先日貴兄と語りし際、まことに小生は暴慢にて候ひき、小生は執拗（しつこ）く己れの立脚地について語り、貴兄等に對する余の觀察を忌憚なく申上げ候ひき、曰く「貴君及びヘンリー・ロオレンス、ロバート・ハモンド等は推論に囚はれし人々なり」と。